

578-181



1200501520675

578
81



7.7.8



古今名家

珍

談奇談逸話集

實業之日本社編



はしがき

疲勞は、人間のあらゆる能率を低下させるものである。慰安のない人生は、砂漠の生活と云へよう。

文化的な騒音と、繁激な勞務とに疲らせられた頭を、少しでも癒し慰めてくれるものは讀書であらう。

酒や女も、或る人々には、人生の慰めの一つであるかも知れぬが、その結果には、更に多くの倦怠と疲勞が附隨して來よう。

一番有意義で、最も安價な慰めは、やつぱり讀書である。それも軽い氣分で、讀み得るものが好い。

さうした意味から、本書の發刊も價値づけられるものがあらう。同時に、短い數多くの

逸話の中から、何か其處に人生への教訓が無いとは云へまい。
 本書に採録した逸話の多くは、嘗て雑誌「東京」「ワールド」等に掲載されたもので編者の多少苦心して集めたものである。

御大典の舉行あらせらるゝ年、八月……編者識

古今名家 珍談奇談逸話集 目次

英雄名將の最後を彩る悲壯な逸話

丹羽長秀	……	一
鬼玄蕃佐久間盛政	……	三
豊臣秀吉	……	六
前田利家	……	一〇
徳川家康	……	一四
石田三成	……	一八
木村重成	……	二二

目次
水戸光圀……………三

名刀に纏はる逸話

八丁念佛……………二六
稻葉の虎徹……………二六
近藤勇の虎徹……………三三
鬼丸國綱……………三三
阿蘇の螢丸……………三四
藥研藤四郎……………三五
長船則光の凄味……………三七
獨眼龍の振分髪……………三六
土州公の一國兼光……………四〇

猿正宗の由來……………四二
武田耕雲齋の春燕……………四四
河合正宗の行方……………四六

江戸時代學者文人の奇行逸話

藤田東湖……………四九
蜀山人太田南畝……………五一
塙保巳一……………五三
林子平……………五五
伊藤東涯……………五五
伊勢貞丈……………五八
金蘭齋……………五九

目次
三

龜田鵬齋	六二
皆川淇園	六三
平賀源内	六五
大窪詩佛	六七

江戸横綱名力士の逸話

明石志賀之助	七〇
兩國梶之助	七三
丸山權太左衛門	七五
釋迦ヶ嶽雲右衛門	七八
谷風梶之助	七九
雷電爲右衛門	八三

古今人氣名優の逸話

稻妻雷五郎	八六
不知火光右衛門	八九
陣幕久五郎	九二
三代目瀬川菊之丞	九四
五代目松本幸四郎	九六
五代目市川團藏	九九
三代目尾上菊五郎	一〇〇
四代目阪東三津五郎	一〇三
七代目岩井半四郎	一〇五
先代市川左團次	一〇七

九代目市川團十郎……………一〇九

五代目尾上菊五郎……………一一一

先代中村芝翫……………一一三

名優女形の女らしい逸話

初代芳澤あやめ……………一二六

中村千彌……………一二八

初代瀬川菊之丞……………一三〇

瀬川菊次郎……………一三三

四代目芳澤あやめ……………一三六

五代目岩井半四郎……………一三八

四代目山下金作……………一四〇

江戸期畫道名家の逸話

尾上菊次郎……………一三一

八代目岩井半四郎……………一三四

市川女寅……………一三五

狩野元信……………一三八

佛繪師良秀……………一四〇

尾形光琳……………一四二

初代廣重……………一四四

葛飾北齋……………一四七

酒井抱一……………一五〇

谷文晁……………一五三

目

次

目

現代畫壇大家の逸話

椿	椿山	一五五
英	一蝶	一五七
池	大雅	一五九
一勇齋	國芳	一六二
勝川	春草	一六三
下村	觀山	一六六
小室	翠雲	一六八
橋本	關雪	一六九
安田	靱彦	一七一
吉川	靈華	一七一

現畫壇名家の苦境時代逸話

小林	古徑	一七四
倉田	白羊	一七六
川島	理一郎	一七九
小出	楯重	一八一
横山	大觀	一八三
中村	不折	一八七
竹内	栖鳳	一九〇
横山	大觀	一九三
島田	墨仙	一九五
青山	熊治	一九八

目

次

目

目次

石井鶴三……………100

川島理一郎……………101

山本鼎……………104

廓を彩る江戸期遊女の逸話

岩龜樓龜遊……………108

扇屋夕霧……………111

西村香久山……………113

三浦屋高尾……………115

萬字屋萬壽……………117

松葉屋瀬川……………118

巴屋勝山……………121

西田屋九重……………124

玉屋琴柱……………126

茗荷屋奥州……………127

信濃屋薄雲……………129

荒町屋泊瀬川……………131

辻君三千歳……………133

島原吉野……………135

近世名僧の奇行逸話

桃水……………136

良寛……………138

無能……………140

目

次

幕末勤王烈士の逸話

浦生君平	二六四
頼三樹三郎	二六六
橋本左内	二六七
平野國臣	二六九
山縣大貳	二七一
眞木和泉	二七三
岩倉右大臣	二七四
久坂玄瑞	二七六
坂本龍馬	二七七
松本圭堂	二八〇

目

次

三

支	二四六
大	二四八
風	二五〇
鐵	二五二
圓	二五三
雲	二五五
月	二五七
環	二五九
穆	二六〇
大	二六一
鄧	二六三
砂	二四六
舍	二四八
外	二五〇
眼	二五二
空	二五三
居	二五五
僊	二五七
溪	二五九
山	二六〇
薩	二六一
州	二六三

目

次

三

目次	一四
大久保利通	二八一
西郷隆盛	二八三
伊地知正治	二八六

近世名人奇行逸話

稻村三伯	二八八
三井養安	二九一
龜田鵬齋	二九二
卷菱湖	二九四
九世大橋宗桂	二九六
伊藤宗看	二九九
長曾根虎徹	三〇一

種原鍵吉	三〇三
久米平内	三〇六
長崎の龜女	三〇八
高村光雲	三三〇
觀世新九郎	三三一
森田宗禪	三三三
山勢松韻	三三五
豊竹麓太夫	三七七
攝津大掾	三八八
初世都々逸仙歌	三三〇
正流齋南窓	三三二
桃川如燕	三三三
目次	一五

三遊亭圓朝……………三三五

四世春風亭柳枝……………三三七

柳家小さん……………三三六

名馬に纏る逸話

井上鹿毛……………三三〇

鬼鹿毛……………三三一

吉川……………三三三

須彌長……………三三四

百段……………三三五

膝突栗毛……………三三六

小紫……………三三六

帝釋栗毛……………三三九

富士の道芝……………三四〇

千兩黒……………三四一

布引……………三四三

古龍……………三四四

年の矢……………三四五

優婆塞……………三四七

巳下黒……………三四八

追風……………三四九

後藤號……………三五二

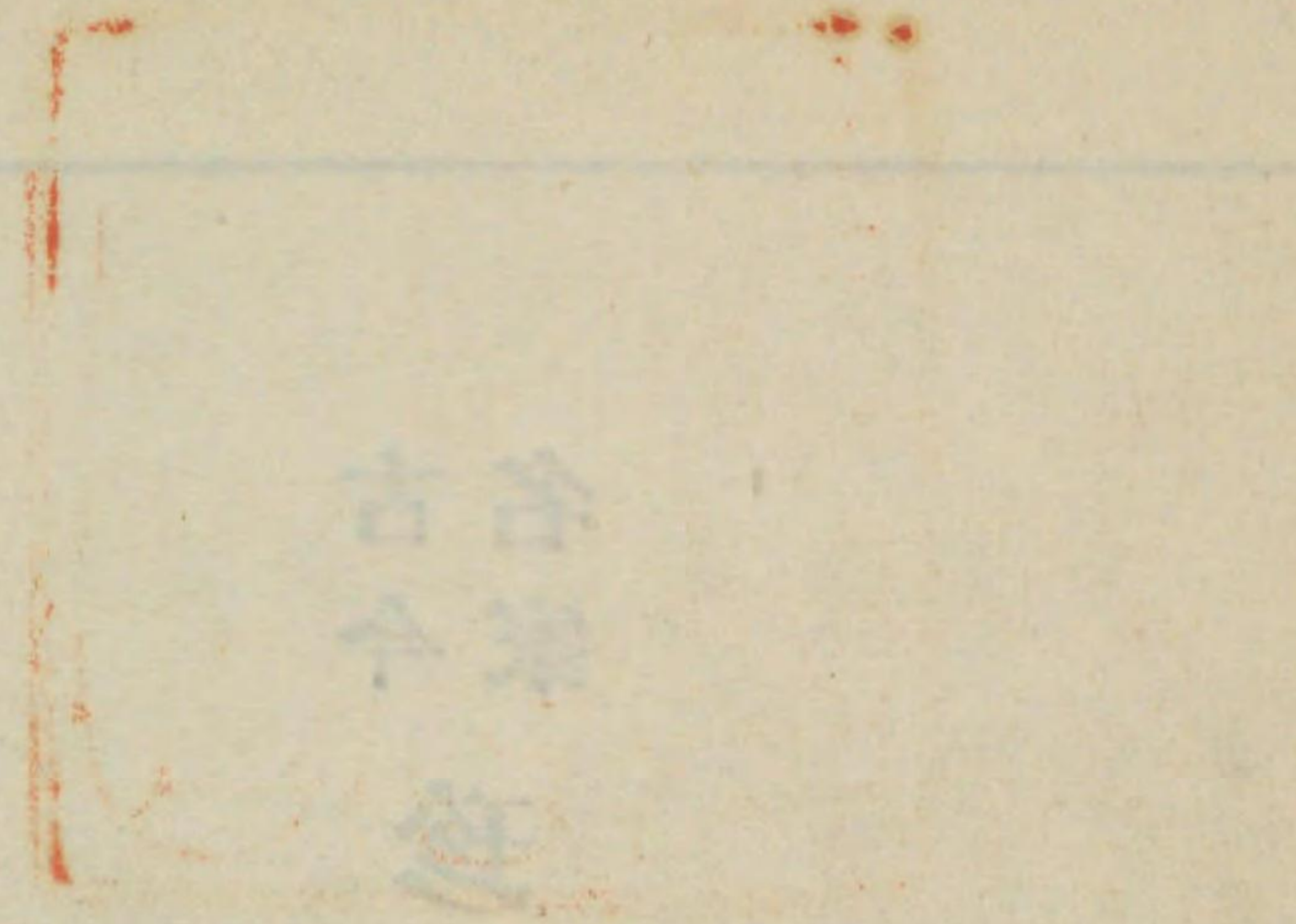
互理……………三五二

古今名家

珍談奇談逸話集

實業之日本社編

此頁為書中內容之影印，文字極其模糊，難以辨識。依稀可見其為多欄式之文字排列，可能為目錄或正文之某一部分。



古今 英雄名將の最後を彩る悲壯の逸話

實業六日本雑誌

英雄名將の最後を彩る悲壯の逸話

丹羽長秀



修理亮長政の子、幼名を萬千代と云ひ、年十五より信長に従つて常に一方の大將を承はり、勇將の名四方に轟いた。織田家の重臣で、丹羽、柴田と並稱され、秀吉も初めは此の二人の姓を一字づつを受け羽柴と名乗つて名譽としたものである。

信長が本能寺の難に斃れてから、秀吉の旗下につく事を快しとは思はなかつたが、質直の長秀は、それでも主君の仇たる明智を一戦に亡ぼした功を重んじて、意を屈して秀吉の

丹羽長秀

下風に甘んじてゐた。然し秀吉が織田家の御曹子たる信雄を擯けて、天下に號令しようとするに及んで、彼の不満は押へる事が出来なくなつた。で、窃に秀吉を除き、織田家の再興を計らうとしたが、旭日昇天の勢を有つ秀吉の前には力も及ばず、且つ年來の癥疾（腹中の腫物）に惱まれて、その目的を達する事が出来なかつた。

「今の世の有様を、亡き殿が御覽になつたら、どんなにか御無念に思召す事であらう、それだのに厚恩を受けた私は、殿の御家を再興する事も出来ず、徒らに忘恩の臣として死ななければならぬのか。」

さう云つては、何うにもならない病軀を、床上に悶えさせた。時には、

「無念ぢやツ」

と叫んで、突然床の上に飛び起き、ハラハラと涙に咽ぶ事も度々であつた。

或る日、彼は突如病床の上に、日夜病苦と懊惱に疲れ果てた身體を起し、

「この腹の中にある腫塊は、この私を日毎夜毎に苦しめ、さいなんで殺さうとしてゐる、

私にとつては怨み深い仇ぢや。……仇なら突き殺してくれるわ。」

と叫ぶと共に、側にあつた佩刀を手早く取つて抜き放つと、我と我が肚に突き立て、かつさばき、臍腑と共に腫物の塊をつかみ出すと、その儘悶絶して死んだ。——それは天正十

三年四月十六日、五十一歳の時であつた。

鬼玄蕃佐久間盛政

——久右衛門盛次の子である、信長旗下の勇將で戰場に鬼と謳われて敵を恐れしめた。賤ヶ嶽の役に柴田勝家に與みして秀吉の軍と奮戦したが、遂に捕へられて斬首され、天正十一年五月十二日三十歳の壯年で世を去つた。

鬼玄蕃盛政が擒となつて秀吉の前に引出されて來た時に、秀吉は年來の親交と、且つ世

に秀でた武勇を惜しんで、

「其許の命を助け、大國を興へようから、私の臣下となつてくれぬか。」

と云つたが、盛政は笑つて、

「仰せは忝ないが、もし私の命を許し、大國を興へたら、何時かは其許も今の私のやうに、縲紲の恥を受けられるであらう。……命を助かり國を得る事は厚い恩であらうが、私は亡き殿(信長)や勝家から受けた恩を報ひないのは武士の本意でない、速かに死を賜る外望む事はない。」

と云つて、聞入れなかつた。秀吉も彼の心中を感じて一層愛惜の念が深かつたが、世に聞えた稀代の武勇者の最後の志を遂げさせてやらうと、遂に斬刑に處する事にした。

死を興へるに先立つて、秀吉から彼に最後の望みを聞いた時、彼は其の面に微笑を浮べながら、

「さらば望み申さう……私の最後を飾る死装束として、大紋付けた紅裏廣袖の小袖、白

帷巾に香を薫べて賜つたら、私が一期の晴ではある、風流この上もなからう。」

と云つたので、秀吉も優にやさしい望みを感じ、それを興へた。

最後の日、彼はその小袖を着て、馬に乗せられて、悠然と京都の街を引廻された。

刑場に入つて、最後の座に直つた時、

「私が血氣に逸つて、舅勝家の言葉を用ひなかつたばかりに、今日此の座に直る事になつた。……只だ怨むらくは、猿面冠者をして擒となさなかつた事ぢや。」

と大聲に叫んで、笑つたので、檢使に來てゐた淺野長政が、

「玄蕃口が廣いわ。捕はれ者の小唄。無禮ぢや。」

と叱咤すると、玄蕃は破鐘のやうな聲で、

「黙れ……大將の志は、其方などに聞かしても詮ない事だが、申聞かすから好く承はれ、頼朝は一旦虜となつたが終に平家を討ち平げ父の仇をば報じたわ。……死を急がぬが大將の志ぢや、其方は知らざるよな。」

と長政を白眼みつけて叫んだ。
そして従容たる態度で、首を斬らせた、その面には尙ほ嘲笑の笑みが何時までも失はれてゐなかつた。

豊臣秀吉

——幼名を日吉と云つた。木下彌一右衛門某の子である。尾張愛知郡中村の土民より出で、竟に海内を平げ朝鮮を征す、後累進して従一位太政大臣關白となり、豊臣の姓を賜はり、薨去の後更に正一位豊國大明神を贈られた、不出世の英雄である。

九州名護屋の陣に病んで、大阪城に歸つて最後の床についた時、彼の後繼者たる秀頼は未だ六歳の幼若であつた。

朝鮮征討の壯舉も、まだ其の央であつた。

彼れを思ひ此れを思ふ時、秀吉の心緒は亂れざるを得なかつた。

懊惱と悶えが日と夜に續いた。

幼い秀頼の顔を眺める時、彼の心は慰まれもすれば、また涙の種でもあつた。この幼い後繼者がどうして、群雄を統治して平安に送り得るであらうか、……同時に、朝鮮に派してある、彼の命の爲めに死を堵して異郷に戦つてゐる、十萬の將卒の運命はどうなる事であらうか。——自分は死ねない、どうしても生きなければならぬ。——然し、日に日に衰へて行く彼自身の病軀は、何うする事も出来なかつた。

ある日彼は、小出秀政と片桐貞盛(且元)を窺に病床に呼んで、

「我が家の亡びないやうに計らうとすれば、國家の禍が立所に起らう、彼を思ひ此れを思ふ時、この七年の間、朝鮮や明と戦つて兩國に仇を結んだことこそ、私が生涯の過りであつた。私が亡くなつた後、朝鮮に渡つてゐる十萬の軍勢を無事に引上げさせ、後々

とも我が國の動きなきやう計り得る者があらうとは思へぬ。それを成し遂げ得るかと思ふ人は、只だ一人江戸内府(家康)があるばかりだ。然し此の人愈よ此の軍旅の後始末を立派に果し、國家將卒のため大功を立てられたなら、神明も其の功を感じ、聖王も其の勳を賞し給ひ、萬民も其の徳に懷き、その威に怖れ、天下は自ら彼の家風に歸するであらう。其の時愁ひに我が舊恩を思ふ者共が、幼弱の秀頼を輔佐して、天下を取らんと謀り、内府と合戦を結ぶやうな事があれば、豊臣の家は亡びてしまふに違ひない、其方達が豊臣の家を絶やさぬやう思つたなら、相構へて内府に能く従ひ、秀頼が事悪しく思はれぬやうに計つてくれ、さすれば豊臣の家名は残るであらう。」

さう云つて説き聞かせた。——それは秀吉の偽らぬ心の底の聲でもあつたが、それは彼にとつて最も悲しむべき最後の望みであつた。——彼としては、やはり秀頼を關白とし、家康や利家を執政として、ゆるがざる家名を残したかつた。そして秀頼を幸福なる生涯に置きたかつた。然し夫れは得られさうでも無い望みであつた。其處に彼の絶えざる不安が

あり悩みがあつた。

——最後の日が近づいた事を知つた秀吉は、或る日前田大納言利家を呼んだ。

五奉行たる石田、長束等を列座せしめた席で、彼は病み果てた病軀をやつと床の上に取り上げ、そして染々と、利家が犬千代時代からの永い過去に於ける交誼と勞苦を感謝し、後事と秀頼の輔佐を依托した。

「……もし秀頼が、關白として其の職を果し得る器で無いと思召さば、御心の儘にお代へ下されたい。」

さうも彼は云つたのである。然し、さう語つて行くうちに、衰へ疲れた彼の弱い心は、幼い秀頼を思ふ愛着に、感情の沸き立つのを何うする事も出来なかつた。

彼は震へる手を差しのべると、利家が手をしっかりと握り締めて、それを自分の頭の上に捧げるやうにしながら、

「……頼み申すぞ大納言、頼み申すぞ大納言……」

さう云ひながら、流れ落つる涙を拭はうともせず、咽び泣きに泣き入つたのである。

「吾ら斯くある中、秀頼様の事、お心安う思召せ……」

さう云つて利家も泣いた。席に列した五奉行はじめ、その光景に接して泣かぬものはなかつた。——この頼みは、勿論家康にもあつた。然し利家の篤實な性格と、家格から云つて、秀吉が眞に信頼の涙を流したのは、利家に對してであつたらう。

かくて不安と懊惱のうちに、稀代の英雄であり、風雲兒であつた秀吉は、慶長三年八月十八日、六十三歳で逝いた。

前田利家

——幼名を犬千代と云つた。縫之助利春の子である。十四歳で信長の小姓として奉仕してから、

あらゆる戦場に從つて勇名を馳せた。人として爲り抗直にして屈撓せず、威儀嚴肅、膽氣壯大なり」と記録されてゐる、秀吉も深く敬視してゐた。後累進從二位權大納言に至り、加賀、能登、趣中

を領し、秀吉薨去大老として秀頼の後見役であつた。

利家病んで臨終の近づいたのを知ると、正室(芳春院)をして遺命十ヶ條を記させ、之を其の子利長に贈り、死後一切の處置を命じた。

愈よ末期の迫つた時、正室芳春院が枕許に近寄つて、

「まだお若かつた頃から、度々の戦場に數多の人をお殺しなされた罪業のほども恐ろしうございますから、……日頃は見苦しと仰せにはなりましたが、私が兼て仕置きました經帷巾をお着せ參らせ、柩にお納めいたします。」

と云ふと、利家はにつこりと笑ひながら、

「私は亂世に生れ、爰彼處の戦場に赴き、敵する者は殺したが、故なく人を苦しめた事はない、だから何の罪があつて私は地獄へ落る事があらう、……もし冥途で牛頭馬頭が

私を侮つて、猥に苛責しようとしたら、先年世を去つた吾が家の勇臣が澤山居らうから、それを前後に従へ鬼共を攻め靡け武威を黄泉に振ふであらう。益なき事を申されぞ。」さう云つたが、やがて沈痛な面持で、

「私は死後の行先より、今生に思ひ煩ふ事がある。……抑も秀頼殿幼くおわして父の殿にお別れなされてから、内府(家康)と吾らを召すにも、江戸の祖父……加賀の祖父と仰せなされ、おいたはしさも限らないのに、かくむざむざと煩ひ死なば、さぞや御力なき事に思し召されるであらう。せめて私が今五七年生き延びたらば、秀頼殿の天下を治めさせられる様をも見届け参らす事も出来よう……」かう云ひさして、眼に涙さへ浮べながら、

「人生も限りある事だから今は詮やうもあるまい……ぢやが……見ぬ世の末の變り行く有様を、つらくと思ひ續ければ、何となく胸の苦しさを覺ゆるぞ……」さう云ひ切ると、彼は今更にまざくと變つて行く世の有様を眼に映し出すやうに、暫

くは兩眼をカツと見開いて空間を凝視してゐたが、やがてギリギリと齒を噛みならずと、いきなり手を延ばして枕元にあつた新藤五郎國行の脇差を取り上げ、鞘ながらに胸に押し當

て、

「ウーム」

と一聲叫んだが、その儘息切れた。——時に慶長四年閏三月三日、利家六十二歳であつた。薨後従一位を贈られた。

——利家の死後、前田の家人徳山五兵衛と云ふのが伏見へ来た時、家康が招いで利家最後の様を尋ねたので、五兵衛は右の様子を委しく告げると、家康は「利家の心中を察せられ、そゞろに落涙せられしとぞ」とある。何の涙であつたらうか。

徳川家康

—幼名を竹千代と云つた。廣忠の子である。信長秀吉に次いで天下を平定し征夷大將軍となり、
 發病後從一位太政大臣に進み、天和二年四月十七日、七十五歳で薨じた。後正一位東照宮を贈ら
 れた。

天和二年正月二十一日、大御所家康は駿府から田中へ放鷹に出かけた。そして其の出
 先へ御氣嫌伺ひに参向した、京都の茶屋四郎次郎から、鯛を胡麻油で揚げた料理の甘い事
 や、それが都で流行してゐる話を聞き、折から榊原内記が献上した鯛があつたので、早速油
 で揚げさせて「常より多く被召上候」たが、二時ほどたつてから「御蟲(腹)痛み申候
 間、御食傷氣御座候」始末で發病した。之れが彼の死病であつた。

小康を得たので、二十五日に駿府の居城へ歸つたが、再び立つ事を得なかつた。
 然し、彼は幸福であつた。後繼者の秀忠は既に將軍職に在つて十二年を過ぎ、三十八
 の壯年であつた。後顧に憂ふべき何物もなかつた。

三月二十七日には、從一位太政大臣宣下の勅使が行列美々しく駿府に下り、莊嚴華麗を
 極めた儀式が相次いで行はれた。秀吉の最後に比べて、何と云ふ華々しさであつたらう。
 でも、不安がまるで無かつたとは云へない。

或る日見舞に馳せつけて來てゐた將軍秀忠に向つて、

「私が死んだら、諸大名を三ヶ年江戸に滞在させ、とくと其の向背を試みられるが好

501

と云つたのに對し、秀忠が、

「仰せでは御座いますが、私の考へでは、さる場合は諸大名を悉く國へ歸し、一兩年
 休息させようと存じます。もし其の中に野心ある輩があつて、籠城の用意でも致しまし

たら、直ちに馳せ向つて踏み潰すまでと存じます。とにかく天下は一陣なくては治り申すまゝ。』

と答へたのを聞くと、家康は満面に喜びの微笑を浮べて、

『その一言を聞かうために、今のやうな事を申したのぢや。』

さう云つたが、感激のあまりか、彼は病床に手を合せて、秀忠を拜みながら、

『さては、天下は泰平ぢや。』

さう云つて、彼は涙を流して歡喜したと云ふ。

一進一退の病床に臥しながら、その間に彼は充分後事に對する萬全の策を講ずる事を忘れなかつた。——そして、その人に應じ、見舞に來た外様の諸群將に謁して、喜ばせたり泣かせたりして、獨りほくそ笑んだ。秀吉旗下の猛將として天下に勇名を馳せた福島正則などは、この老ぼれた病床の家康に、皮肉な痛い言葉を浴せられて、サメ／＼と泣かされたものであつた。彼の頭の中には、もう正則などは内胃まで見透してゐたのであらう。で

も流石に獨眼龍伊達正宗には、多少の畏怖を感じてゐたものか、或る日政宗が見舞に參向した時、特に側近く「御病床御蒲團の上まで召されて、

『吾ら亡き後、將軍の事くれ／＼も頼み參らす。』

と懇ろに云つて、なほ形身にもと「清拙の墨蹟」を給つたので、政宗も感激の餘り落涙

して、暫くは「御前をまかで兼しとなり」とある。

四月十五日、彼は突然駿府町奉行落合小平次を呼びよせ、三池典太の佩刀を渡し、

『これで死罪の者を斬り、試して來い。』

と命じたので、小平次は早速その切れ味を試めした上、

『切れ味かなる名劍にございます。』

と云つて差出すと、彼はそれを受取り、やがて病床に起き上ると、典太の太刀をスラリと抜き放ち、暫くは、薄紫の露もした／＼りさうな双の姿に見入つてゐたが、やがて三度ほど打ち振つて、その儘侍臣に渡し、

「この劔を以て、永く子孫を鎮護させよ。」

と云つて、快く微笑んだ。――そして其の翌十六日、多くの子息近親、譜代の重臣等が看護のうちに、靜に永久の眠りに入つた。

石田三成

――幼名を佐吉と云つた。近江石田村の土民左五右衛門の子である。觀音寺に小僧として使はれてゐた十三の時、秀吉に其の優れた才智を見抜かれて小姓に召出され、遂に治部少輔に任じ大坂奉行の一人となつた。後大坂の遺命を奉ずると稱し關西の諸將を語らひ、家康に抗して關ヶ原に戦つたが敗れ、捕へられて斬首された。

關ヶ原の役に一敗し、捕へられて斬首せらるゝの前夜、家康から三成をはじめ、同時に

刑に處せらるゝ小西行長、安國寺惠瓊に、小袖一重づゝを賜つた。行長は小袖を見て、「寒さを凌ぐべきとて賜りし段、忝なく存じ候」と云つて受け、惠瓊は「それ着せよ」と云つて着用した。

三成は、その小袖を見ると、

「これは何れから贈られたか。」

尋ねた。使の者が、

「上様からでございます。」

と答へると、三成は更に、

「上様とは誰の事だ。」

と尋ねたので、

「内府様(家康)の事でございます。」

と云ふと、三成はホソと吐息をつきながら、

「さて、上様(秀吉)は、つい此の間御他界になつたばかりなのに、もう内府を上様と云ふのか。」

と云つたばかりで、その小袖に手も觸れやうとしなかつた。

最後の斬られる日が来た。彼は捕へられた日から腸を痛めてゐたので、その朝まで蕪の雑炊を作らせて食べてゐたが、刑場へ赴く途中、咽喉が乾いたので、湯を所望したが、折から其の邊になかつたので、警固の者が、

「この邊で湯は手に入りませぬから、この甘干の柿でも、お食べなされ。」

と云つて差出すと、三成は、

「それは腹へ毒ぢや、食べまい。」

と云つたので、それを聞いた人々が「今首を刎らるゝ人の、毒断ちすることこそ可笑しけれ」と云ひ合ふのを、耳にした三成は、

「お前たちのやうな者の心では、笑ふのは尤もだが、大義を思ふ者は、たとへ首を刎ら

れる際までも、命を大切に、何卒本意を達しようと思ふ者ぢや。」

さう云つて、につこりと笑つた。それは丸で今死に行く人のやうな様子ではなかつた。

やがて六條河原の刑場に着いたが、顔色平生の如く、悠然として死に就いた。——慶長五年十月朔日で、三成三十八歳の時であつた。

木村重成

——高野山へ押込められて詰腹を切らされた前關白秀次の重臣で、同時に主君の死に殉じた常陸介重茲の子である。後秀頼に召出されて大坂城に入り、長門守に任せられ、智勇兼備の若大将として名があつた。元和元年五月六日、二十三の盛りで戦死した。

大阪城の最後の日が近づいた、元和夏の役が開始された五月の初め頃から、重成は兎角

食事が進まないやうになつた。妻が夫れを心配して、ある日、

「この度は落城が近いと云ふお噂でございますが、その爲め御食事が進まないのてござますか。」

と尋ねると、重成は笑ひながら、

「いや、さうでは無い、……昔後三年の戦ひに、瓜割四郎と云ふ者天性臆病であつたが、朝の食事が咽喉を下らなかつたので、敵に首の骨を射切られた折、その疵口から食べた物が出て耻を曝したと云ふ話がある、私も敵に首を取られた際、死骸の見苦しからぬやうに心掛けて、食事を慎んでゐるのだ。」

と答へたのを聞いた妻は、にっこりと笑つて退いたが、寢室に入つて遺書を認め、年十八の花を自ら双に伏して倒れた。妻は眞野豊後守頼包の娘で、才色兼備を謳はれた。

戦況日に悪しく、落城の日の迫つた五月五日、彼は久しく風邪で髪も延ばした儘であつたが、その宵は湯にも入り、髪も洗ひ、香を燻ぎ込め、快い風情であつた、そして靜に居

間の柱によりながら、江口の曲舞紅花の春の朝と云ふのを謡ひ、夜ふくるまで餘念なく小鼓を打つてゐた。

明る六日、赤備井伊直孝の勢と、手痛く戦つて討死した。

水戸光圀

——幼名を千代松と云つた。家康の孫で權中納言頼房の子である。徳川の三家水戸の封を襲ひ、後致仕して西山と號した、所謂水戸黄門として後世に名を残した偉人である。元禄十三年十二月六日、年七十三で薨じた。

家を早く長兄の子綱條に譲り、近郊の西山に住んで、田を耕し草をつみ、書に親しみながら悠々自適してゐた。その佗住居には禁錮された家臣の娘三人を召使つてゐた。

その中の一人の女が、年頃になつたので、配偶を求めて嫁入らす事になつた。そして十月十三日が吉日だと云ふので、その日に婚禮の式を挙げさせる事に定めてあつた。その少し前から、光圀は病に伏した。そして丁度婚禮の日になつて急に病が重り、危篤に陥つてしまつた。従つて嫁入りの召使の事などは、誰しも考へに浮ばせる者もなく、只だ主君の病状を案じわづらつてゐた。

夕近くなつた頃、光圀はフト眼を開き、近侍の者に命じて、兼ねて用意させてあつた臺の物を運ばせ、直ぐに其の召使の女を枕元へ呼び寄せさせ、自ら箸を取つて臺の上の鬘斗を挟んで女にやらうとしたが、重態の事として手が震へて利かず、なか／＼挟む事が出来なかつたが、やうやうの事で、それでも自分で挟み取り、その女に與へ、

『勤めて、目出度う繁昌せよ。』

と、咳くやうに云つて、暇をとらせた。

女は、精神も失つた様な危篤の状態にある主君が、なほ卑しい召使である自分の婚禮の

日を忘れずに、病苦の中で不自由な手から鬘斗をとつて、暇を與へてくれる、光圀の厚い情に感激しないではゐられなかつた。陪侍の者も、その床しい場面に直面して、何となく胸が迫つて涙に咽んだ。

女は涙ながらに、その高恩を謝すると共に、その場は罷り立つたが、次の席に入ると、咽び泣ながら、

『御危篤の殿様を置いて、今日お暇をする譯にはまゐりません。』

と云つてきかなかつたが、「殿があれ程のお心入れ、却つて御意に戻るであらう」と、人が無理に勧めるので、泣く／＼其の夜目出度く嫁入りした。——光圀の心鏡を、如實に映し出した逸話ではあるまいか。

名刀に纏はる逸話

八丁念佛

戦國時代の勇士に、紀州の浪人で雑賀孫市と云ふのがあつた。織田信長が石山本願寺を攻めた時、本願寺方に味方して信長勢に抗し、大いに勇名を轟した。後慶長五年七月伏見の城攻めに、大阪方の寄手に加はつて城將島居彦右衛門を討取り、益々驍名を天下に擧げた。その後家康に召出され水戸頼房に附けられ、子孫代々水戸家にあつて千石を領した。

この雑賀孫市の佩刀に「八丁念佛團子刺」と云ふ太刀があつた。その名稱の由來には興味ある挿話が殘されてゐる。

ある月明の夜であつた。孫市は自分の佩刀の斬味を試めさうと思つて辻へ出た。と、寂しい道を、念佛を唱へながらトボくと歩いて行く人影が見えた。彼はいきなり馳せ寄ると、袈裟掛けに斬りつけた、確に手ごたへはあつたのであるが、不思議や其の斬られた男は、なほ念佛を唱へながら歩いて行くではないか。

孫市は不審の首をかしげながら、その刀を抜身のまゝ杖について、その男の後をしたつた。凡そ八丁程來た時、ピタと念佛の聲が途絶えたと思ふと、その男は二つになつて倒れて死んだ。

その時杖について行つた刀を見ると、往來の石が切先へブツリと刺貫ぬかれて、團子の串刺のやうになつてゐたと云ふ。

「八丁念佛團子刺」の名は之れから出たのである。當時「雑賀の八丁念佛」と云つて、名

譽の太刀であつた。作は備前の行家で、二尺九寸もの、今は小梅の徳川家(舊水戸家)に藏されてゐると云ふ。

稻葉の虎徹

時の大老として權勢を振ひ、私利曲事を逞しうするのを憤つて、美濃青墓一萬二千石と共に、その身命を君家に捧げる覺悟で、若年寄稻葉石見守正休が、大老堀田筑前守正俊を、千代田城本丸料理の間で斬奸したのは、貞保元年八月二十八日の巳の刻であつた。その曉、最後の登城に際して、老臣や近侍の出仕したのを見ると、石見守は今度新たに拵へたと云ふ脇差を取出して、

「どうぢや、この脇差は切れさうか？」

と云つて見せた。何れもが拜見して、

「天晴れの名刀、鐵もたまり申さぬ事と存じ上げます。」

「ウム……虎徹ぢやよ。」

石見守は頷きながら、斯う獨り言つやうに呟いたが、ジツと白刃を凝視て、につこりと笑ふと、其儘腰に差して屋敷を出た。それが君臣の間に交された最後の言葉であつた。

お城に登ると、兼ねての企劃通り、お坊主を大老の用部屋へ使にやつて「御用談につきお眼にかゝりたい」と申入れさせた。

それを聞くと、堀田筑前守は何心なく立つて、スタ／＼と御廊下を料理の間の入口まで來た。この様子を見ると、石見守はスル／＼と近寄つて、

「筑州殿……」

聲を掛けると同時に、堀田の脇を左手にむづと攔んで、持上げる刹那、右手に抜き放した新刀の脇差を、脇腹から左の肩先まで突き上げて割つた。

「ウーム」

と云ふ堀田のうめき聲と物音に、廊下へ出た老中大久保加賀守が「狼藉者ツ」とばかり石見守の後から斬りつけた、彼は振向くと、

「御存分にお斬りなされえ。」

と叫んで、なほ堀田の脇腹を刳つた。續いて駈けつけた、戸田山城守、阿部豊後守も石見守に斬りつけたが、彼は尚ほ大老堀田を放さなかつた、で、彼は差貫いた刀も抜かず、堀田に打重なつて倒れた儘、斬られて死んだ。

その脇差は、當時名鍛冶の稱があつた大曾根虎徹の鍛へたもので、一尺七寸であつた。石見守が身も家も捨てゝなした、この斬奸忠死と共に、彼の脇差は「稻葉の虎徹」と賞へられた。新刀虎徹の名聲が、これに依つて更に高まつたと云はれる。

近藤勇の虎徹

虎徹で想起されるのは、幕末京洛の繪巻を血しぶきで彩つた、新撰組の隊長近藤勇の愛刀虎徹である。當時國事に奔走しつゝあつた尊王の志士が、如何に彼の虎徹を怖れた事であつたらうか。——然も、その虎徹に纏る悲喜劇がある。

元治元年六月五日の亥刻、三條小橋池田屋を包圍して殺倒したのは、新撰組に桑名會津の兵を合せた一隊である。

肥後の宮部鼎藏、長州の桂小五郎（後の木戸孝允）等二十餘名の勤王志士が集つて、密議を凝らしてゐたのを、新撰組に嗅ぎ出された爲めであつた。

絃歌紅燈の料亭は、臨時にして血腥い修羅場と化した。——愛刀虎徹を振つて、勇が其

の先頭に活躍した事は云ふ迄でも無い。敵の死體七ツ、手負四人、召捕十數人と云ふのを見ても、當夜の死闘が如何に激しかったかは、所謂池田屋事件として史上に傳へられてゐるのを考へても察せられよう。逃れたのは桂小五郎一人で、俠妓三本木の幾松方に匿まはれたのは其の時の話である。

勇は最も奮戦して、志士を斬つた、然し愛刀虎徹に刃零れ一つなかつた。

『虎徹は好く斬れるわい。』

そう云つて彼は喜んだ。——その後、江戸へ歸つた時、その虎徹を納めた刀屋を呼んで、五兩の祝儀までやつたと云ふ。

けれども、その實は眞物の虎徹でなく、當時四谷正宗との稱があつた山浦清麿の作を、虎徹と稱して近藤に飲めてあつたので、刀屋は内心ビク／＼もので、勇に呼ばれた時は、偽物の露見かと蒼くなつて出かけたものであつたが、御祝儀まで貰つて禮を云はれたので、ホツと胸を撫でおろしながらも、尻くすばゆい思ひがしたと云ふ。それだけに、勇の秀れた腕の冴えが思はれる。

鬼丸國綱

栗田口國綱は、後鳥羽天皇の御番鍛冶で、天皇が隱岐國へ流され給うた時、お供を申上げたものゝ一人である。その後鎌倉の北條泰時から招ぎを受けたが、彼は「天皇の御在世中は此の地を離れぬ」と云つて、その招ぎに應じなかつた程の尊王家であつた。

天皇崩御遊されて、一年を経た後、初めて鎌倉へ下つた。其處で泰時は刀の鍛錬を頼み、幾振か打上げた中で、最も上作の分を自身の差料にした。そして國綱へは良田三十町を與へたと云ふ。

その後泰時は、フト物の怪に憑かれて病に臥し、夜になると夢現のなかに鬼が現はれて

悩まされる日が続いた。ある夜の事である、枕元に立て、置いた國綱の太刀が、いつか倒れて鞘が割れ、傍にあつた火鉢の足に附いてゐる鬼の面を切り落した。不思議な事に思つてゐると、その夜から鬼の夢に悩まされる事がなくなつて、泰時の病は日に日に癒えて行つた。

泰時は深く名刀の奇蹟に感じ、名を「鬼丸」とつけ、北條家の重器とした。

阿蘇の螢丸

建武三年三月三日、菊池九郎武俊は南朝の御味方として、足利尊氏と多々羅の濱で戦つた。この時肥後阿蘇神社大宮司惟國の子、惟直、惟成、惟澄の三兄弟も、菊地の軍に加はつて奮戦した。然し官軍利なく、菊地を初め惟直、惟成等一族郎黨は戦場の露と消え、只

だ惟澄一人太刀を振つて敵を悩まし、一方の血路を開いて矢部の城へ引取つた。

この時惟澄が佩いてゐた太刀は、三尺五寸の來國俊の作であつたが、終日の亂戦に双は零れて箆のやうになつてゐた。

その夜夢に、數萬の螢が飛んで来て、太刀の双に止まると見たが、翌日眼覺めて見ると不思議や双は元の如くになつて、少しの双零れもなかつた。——以後、それを「螢丸」と名づけたと云ふ。

藥研藤四郎

明應の頃である。畠山政長は細川政元の爲めに圍まれて、將に自害に及ぼうとした。彼は、帯してゐた吉光の短刀を抜くと、諸肌ぬいで腹に突立てようとした、然し何うし

でも切れない、三度刺したが腹が切れない、政長は、怒つて吉光の短刀を投げつけたと、傍にあつた薬研に當つて之れを貫いた。

政長は夫れを眺めると、

「累代の寶刀、流石に其の主人を殺すに忍びぬと見えるわ。」

と嘆じた。その時重臣丹下備後守、自身の帯した信國の短刀を抜き放ち、吾と吾が股を刺し試みた上、

「殿、この刀、切味よろしうござる。」

と云つて政長に渡した、それで彼は快く腹を掻き切つて斃れた。

この藤四郎吉光作の短刀は、薬研を貫いたと云ふ處から、その後「薬研藤四郎」と呼ばれ、後に松永彈正の手に入つて秘藏されてゐたが、更に信長に獻じられた。然し本能寺の變と共に消えた。

長船則光の凄味

則光、康光、清光は、應永の頃「備前の三光」と呼ばれた名鍛冶であつた。

仙臺(伊達家)の臣石川彌兵衛と云ふ人、この長船則光の刀を振つて、戰場を馳驅して敵を斬る事七十餘人、その他辻斬、手討等數知れぬものがあつた。この刀長さ二尺七寸、代子孫に傳へたが、不思議に此の刀は血を見る事を好んで、人を殺める者が代々續いて出た、遂には祿五百石を削られ二百五十石となつた。

その後、悦之進と云ふ者の時、やはり此の則光を持つて、東山折壁町に於いて又も十一人を斬殺したので、石川の家は斷絶した。

悦之進が、則光を振つて人を斬るのを目撃した者の話によると、六尺棒を持つて打つて

かゝつた敵を、一打に切下せば、棒は眞二つに切れて、その者は大袈裟に斬り割られ、悦之進が刀を引くと同時に、二つになつて倒れたと云ふ。その妻い斬味に、見る者思はず身を震はせたと傳へられる。

獨眼龍の振分髪

北國の雄、獨眼龍伊達政宗が、或る日江戸城本丸に登城した時、同席の大名の藤堂高虎が政宗に向ひ、

「其處許の佩ばる、脇差は、やはり正宗の作でござるか。」
と尋ねた。政宗は。
「仰せの通りでござる。」

と答へたが、その日歸邸すると、すぐ重臣を呼んで、今日殿中に於いて、自分の帶してゐる脇差を「正宗でござるか」と聞かれたので、さうで無いとも云へず「仰せの通り」と返事はしたが、實は知つての通り家には正宗の脇差はない。然し斯く大國を領する吾等の持物とて、人々は脇差も正宗と思つてゐるらしい、この後もし「拜見を」など云はれては赤面せねばならぬ、

「それで、余は秘藏の正宗の刀を脇差に直さうと思ふが、早速鍛冶の者呼び寄せて貰ひたい。」

と命じた。呼び出された鍛冶の者は、改めて正宗から其の命令を聞くと、
「正宗の御刀は天下にも數の定つたものでございます。むざとお切捨を遊ばすのは勿體ない事と存じます。」

と人つて嘆き止めた、同時に家臣の者も、様々に諫めたが政宗は承知しない。それで餘儀なく鍛冶の者も拜承して其の刀を脇差に直した。そして其の脇差に「振分髪」と云ふ銘

を入れて差し出した。政宗は其の銘を見ると、これは如何なる意味かと尋ねた、鍛冶の者が答へて、

「業平朝臣の歌に……くらべてし振分髪もかたすぎぬ、君ならずして誰かあぐべき……と云ふ歌の意でございます。」
と云つたので、政宗初め人々も、優にやさしい其の心にいたく感じ、その後「振分髪」の脇差と云つて、伊達家の名器として尊ばれた。

土州公の一國兼光

紀州の頼房卿が、土州藩山内土佐守の愛藏してゐる兼光が、世に名高い大業物であると云ふのを聞き傳へて、ある時藤堂高虎に對して、土佐守の兼光を所望してくれと頼んだ。

高虎は、

「それは易い事でございませう。土州も他ならぬ貴方様の御所望とあらば喜んで差上げるに違ひございません。」

獨り承知で引受けて、早速土佐守忠義を訪ねて、紀伊大納言が兼光所望の件を話した、すると忠義は元來氣象の非常に激しい人であるから、

「以ての外のことござる、あれは吾ら秘藏第一の刀、進上などは思ひもよらぬ。」
と劍もほろゝの挨拶であつた。高虎も少しムツとしたので、

「左様に仰せられても、もし將軍より御所望とあらば、差上げずばならぬではないか。」
と押し返すと、

「例へ將軍の命でも、あの兼光は差上げ申さぬ、……土佐一國に換へても嫌やでござる。」

これには、高虎も飽れかへつて二の句も告げ得ず辭して歸つた。

然し、この話が評判になつて、土州公の「一國兼光」と云はれ、一層名高いものになつた。忠義が國に代へてもと云つただけ、この兼光は無双の上作であると云ふ。

猿正宗の由來

肥後熊本(細川公)からの飛脚が二人、御用箱をかついで東海道を下り、駿河の薩摩峠へかゝつたのが曉であつた。

旅人の通行もまだ途絶えてゐる。山から麓の方を眺めながら行くと、折から大きな章魚が海から上つて来て、一疋の大猿の手に纏ひつき、海の方へだんく引き入れようとしてゐる、猿は岩角につかまつて、一生懸命に争つてゐるが、猿の方は弱つて行くばかりであつた。この有様を見つけた二人の飛脚は、面白い見物と石などを投げて眺めてゐた

が、今一息で猿がズル／＼と海へ引込まれようとした際、飛脚の二人は思はず濱邊へ走り下りて、刀を抜いて章魚の足を切り落した。それで猿は危機一發を救はれたのである。

猿は「キ、」と鳴いて、如何にも喜びに堪えぬやうに叫んだが、突然飛脚が傍に置いた御用箱を掴むと、一散に森の中へ駆け込んでしまつた。驚いたのは飛脚たちで、大切な御用箱を紛失させては大變と、一生懸命に後を追つたが、森の深い山中とて、何うする事も出来ず、何時か猿の姿を見失つてしまつた。

「これは飛んだ事になつた。」

「どうした物だらう。」

二人は顔を見合せ、蒼くなつて吐息をつくばかりで、この儘江戸へ下る事も出来ず、只だ途方にくれてしまつた。すると遙か森の奥で、「キ、」と猿の鳴く聲がするので、ふと其の方を見ると、先刻の猿が片手に御用箱を差上げ、片手に何やら包んだ長い物を持つて二人の方へ走つて来る、やがて近寄ると其の二品を置き、平伏して禮をすると其儘又山の奥

へと駈け去つた。さては先刻の禮に此の藁包を持つて來たものであらうと、二人は初めて安堵の胸を撫で下ろし、その儘御用箱と藁包を持つて江戸へ下つて藩邸へ入つた。扱て、藁包を開いて見ると、それは棒鞘に入つた刀であつた。其處で仔細を委しく申立て、殿の御手許へ差出した。段々刀を調べて見ると、それは正宗である事が解り、細川侯も大いに喜ばれて、二人の飛脚には厚く褒美を與へ、その刀は「猿正宗」と名づけて家寶とした。

武田耕雲齋の春燕

筑波天狗黨の首領武田耕雲齋は、幕末の舞臺に活躍した大立物の一人である。元水戸家の重臣で伊賀守と云つてゐた。

或る日馬上で那珂湊へ赴いた、丁度湊の釋迦町と云ふ處へ來かゝつた時、どうした事か急に馬が物に驚いて暴れ出し、流石の伊賀守も鞍にたまらず落馬した。その折腰に差してゐた愛刀包永が鞘走りして、少し脱けかゝつた拍子に落ち、その爲め刀が曲つて仕舞つた。後で鞘に納めようとしたが、七八寸入らない、抜けかけた刀を差しても歩けないので、それは若黨に持たせ、自分は家來の刀を差して歸つた。かうした刀の曲りは素人には直せないから、鍛冶に頼まうと思つて床の間に立てかけて置いた。

四五日経つてから、ふと見ると不思議や鞘にきちんと納つてゐる、この話を其の道の巧者な人に話すと、古刀の名作は曲つても亦元の姿に自然に直る事がまゝあるとのことであつた。

「それは不思議だ、元に返ると云ふなら燕のやうなものだ、以來春燕と名づけよう。」と云つて、一層愛藏してゐた。

河合正宗の行方

「河合正宗」と云へば、講談で有名な「伊賀の水月」に出て来る、河合又五郎を想ひ起させ、また荒木又右衛門の仇討、伊賀上野の大殺陣の因をなした刀である、この刀が何うした事か、幕末の頃土佐の山内家に傳つてゐた。

幕末の傑物土佐藩主山内容堂侯は豪快瀾達の殿様であつて、常に青年志士を伴つては酒樓に盃をあげて談論するのを快としてゐた。

その夜も、後藤象次郎や板垣退助を連れて、柳橋の龜清に愛妓お貞を侍らして痛飲した、青年たちが歸つた後で、愛妓の膝を枕にうつらうつらとしてゐる時、やつて來たのが兼て最負にしてゐる、繪師で野幫間の荒木寛一である。

「好く參つた、飲み直さう、しかし此の座敷でも興が無い、船を浮べよう。」

直ぐ仕度を命じて、やがて船に乗つた隅田川を上流に棹さし、また盃を重ねて、夜半に龜清へついた時には、流石の容堂侯も荒木も泥酔の極にあつた。

「荒木、……今夜の引出物ぢや。」

さう云ふと、容堂侯は腰にした太刀を寛一に與へた、荒木も半ば夢中で有難く刀をお受けし、やたらに頭を下げたが、やがて駕籠に乗つて下谷青石横丁の自宅へと歸つた、そして倒れるやうに床に入つて眠つた。

翌朝眼を覺ますと、枕元に立派な一腰がある、縁頭は宗與の赤銅拵へ、目貫は金の龍、柄は黒糸、鞘は絲卷に金無垢獅子、——だんぐ想ひ起して行くと、昨夜の引出物である事も判つて來たし、同時に其の刀が容堂侯自慢の秘藏物である「河合正宗」である事も判つて來た。——恐らく殿も、泥酔の極夢中で與へられたものであらうと思ふと、身に添はぬ天下の名刀など空恐ろしい様にも思はれて來た。

荒木は急いで顔を洗ふと、直ぐ橋場の下屋敷を差して出かけた。お眼通りに出ると、容堂侯は折から松平春嶽侯と碁を圍んでゐた。會釋を終ると荒木は昨夜の話をして引出物の刀を差出し、

「私のやうな貧乏繪師には不似合の品でございます、御手許へお止め置き願ひます。」と云つた。すると容堂侯は、

「お前、昨夜それを差したか」と尋ねた。

「さ、判然とは覚えませぬが、駕籠を下りまして、露路を入ります際、一寸差しましたやうに存じます。」

と答へた、それを聞くと、

「馬鹿を申すな、お前が一旦差したものを、私の文差料になるか。」

と云つて、笑つて取らなかつた。荒木は餘儀なく家へ持歸つて大切にしていゐたが、その子の寛友の時に賣拂つて、今では某亞米利加人の手に入つてゐると云ふ。

江戸時代學者文人の奇行逸話

藤田東湖

或る卜者が、水戸の藤田東湖を訪ねて、

「自分は天文学を學び、その奥旨を究め申した。古から天に二日無しと言ひ傳へるが、自分はさうは思はない、それに就いて新しい發明をなした者です。」

さう云つて、くどくどと其の理由を説明し、且つ其の後で、

「どうか貴方から老公(水戸烈公)に御推舉を願ひ、天下に此の説を擴め申したい。」

と頼んだ。東湖は快く其の依頼を承諾した上、更に云ふには、
『私にも一つお頼みがある、幸ひに其の成否を占つて頂きたい。』
と云つたので、卜者は非常に得意然として承知した。其處で東湖は筆をとつて紙片に何
事かを認め、それを茶碗に伏せて、

『これを、お占ひ願ひたい。』

と云つた。卜者は悠然と筮を立てた後、やがて出たのは「睽」の卦であつた、即ち、

『これは事成らざるの兆でござる、速に中止なるゝが宜しうござらう。』

と云ふ。東湖微笑みながら、茶碗をあげて其の紙片を示すと、墨くろくくと、

「卜者願ひの成否如何」

とあつた。——卜者見て嘖然、暫くは口もきかず呆然としてゐたが、やがて悵然として

去つたと云ふ。——學究的な一面、東湖には斯うした洒脱なところがあつた。

蜀山人太田南畝

本名は直次郎と云つて、幕臣旗本の直參であり、非常な學者で幕府でも重く用ゐられた。
然し世間に傳へられてゐる處のものは、狂歌狂詩の達人としてゞあらう。ペンネームは澤
山あるが、蜀山人、四方赤良、寢惚先生が名高い。——酒脱で豪快で、酒を好んで、常に
紅燈緑酒に親しんでゐたから、何時も家は貧しかつた。

或る日戯作者の十返舎一九が、蜀山人の名を慕つて訪ねて來た。すると何うした事か、
座敷に通されたまゝ、何時まで経つても主人の蜀山人は出て來ない。旋毛まがりな、癩癩
持の一九は、冷遇された事と思つて、パイと歸つてしまつた。

それから幾月か経つて後、文人達の寄合があつた、その席で一九と蜀山人も顔を合せた。

神經質な一九は、此の間の待呆けの事を根に持つてゐるので、一杯機嫌で蜀山人に向つて嫌味交りで、その無禮さをなじつた。すると蜀山人は、相變らず、晴れやかな調子で、

『それは氣の毒だつた。でも私も、あの折懐具合が悪かつたので、君と一杯やる資本がなかつたのだ、それでフト氣がついたのは庭に生えてゐる桐の木、あれを下駄屋に賣り拂つてと思つたので、君を待たせた儘一走り下駄屋へ行つたのだが、漸く賣りつけて金を握つて歸つて見ると、もう君がゐなかつたので、がっかりして獨りで飲んでしまつたのさ。』

と云つて笑つた。それを聞くと一九は、

『あゝ、それは……』

と云つたが、笑ふ事は出来なかつた。感傷的な一九の眼には、何時か熱い涙が沸き上つてゐた。

それ以來二人は、非常な深い交友になつた。

塙保巳一

「群書類聚」の著者として、盲目にして一世に名を成した塙檢校が、或る日床屋へ行つてゐると、其處へ一人の男が入つて来て、店にゐる人たちの前に一通の書状を出し、「この手紙の届先が解らぬが、どなたか御承知の方はないだらうか」と尋ねた。人たちが見ると、その表の宛先は「本所清明」と書いてあるが、清明と云ふ字を讀める人もないし、さう云ふ町を知つてゐる者もない。店の者が、

『さうく、檢校がゐらつしやる、……先生、サンスイに吉と云ふ字は、何んと讀みますのでせう。』

と尋ねた。すると檢校暫く考へてゐたが、

『それは油町の間違ひだらう、油町なら直ぐ其處ではないか、一寸行つて訊ねて見な
やう。』

と云つたので、その男は喜んで直ぐ出て行つた。暫くして歸つて來たが、

『お蔭で解りました、用事が済みました、どうも有難うございました。』

と、厚く禮を云つて歸つて行つた。それを聞いた床店の者も、店に居合せた人たちも不

思議に思つて、

『先生、どうしてあの字が、油町の間違ひとお解りになりましたのでせう。』

と尋ねると、檢校は笑ひながら、

『宛名を書く人が、フト油と云ふ字を忘れ、傍にゐた人に聞いた處、サンズイにヨシト

云ふ字だと教へられ、そのヨシを吉原の吉と考違ひして、あんな活の字を書いたもの

だと察したので。』

と答へたので、人々も今更に敏感で頓悟な檢校の頭腦に敬服させられたと云ふ。

林子平

子平の兄嘉膳の妻が、人の嫌ふ疫病に罹つて危篤に陥つた。親戚の者たちも、その傳染
を怖れて近寄らうともしなかつたが、彼は獨り其の側を離れず、夜の眼も寝ずに看護に盡
した。然し心づくしの甲斐も無く、兄の妻は遂に世を去つた。

その屍を見守つて、その夜兄と二人寂しく通夜をしたが、兄も看病疲れと氣落ちに、
思はず暫くウト／＼と眠つてしまつた。更けて行く夜寒むに眼を覺まして見ると、弟子平
の姿が見えない。フト氣がつくと、妻の屍を掩うた衾のなかから、鼾の聲が聞えるので、
驚いて掛物をはぐつて見ると、子平は死骸と並んで好い氣持さうに眠つてゐる。良人であ
る自分でさへ、疫病で死んだ妻の側にゐるのが、なんとなく心持が悪いと思ふのに、それ

を平気で同じ衾に寝てゐる。弟を見ては呆れざるを得ない。それに、もしひよつと弟にまで傳染してはと思ふと気が氣でない、思はず聲を高めて、

『死んだ人間と一緒に寝る奴があるかッ。』

と叱りつけると、子平は其の聲に眼を覺まして、のそ／＼と起き上りながら、

『夜が更けて寒くなつたのと、疲れが出たので、一寸嫂さんの側へもぐり込んだんですよ。……もう死んだ姉さんの衾のなかへ入つても、兄さんは妬けるのですか。』

さう云つて笑つた。兄も今更ながら、物事にかゝすらはない。曠達な弟の氣象には、驚き且つ感じながらも、苦笑するばかりであつた。

伊藤東涯

或る夜、時の大儒東涯先生は、酔歩蹠蹠として家路を指して歸つて來た。と、途中で急に小用が足したくなつたので、暗い街路の軒下に立つてシャ／＼とやつた。好い心持になつて其處を立去つたが、二三丁ほど來てから、フト考へて見ると、今小用を足した場所が少し氣になつた、それで更に立戻つて好く見ると、それは防火の爲めに備へた水桶のなかであつたのだ。

いたく自ら暗中に恐縮した東涯は、早速その家の戸を叩いて家人を起し、

『夜中お騒がして相濟まぬが、酔つたまぎれに、心つかず御宅の用水桶に小用をいたしてしまつた、なんとも申譯がござらぬ、どうかお許しを願ひたい。』

わざ／＼自分の不始末を物語つて詫び入つた。

翌日、夜の明けるのを待ち兼ねて、小者を遣して其の水桶を洗ひ清めさせた。——東涯の人格を物語る一つの床しい挿話として傳へられてゐる。

伊勢貞丈

本名は伊勢平藏、幕府の旗本で「武家古實」の著を以つて、その名後世に傳つてゐる。人と爲りが直亮で、世に阿り俗に従ふ事も好まなかつたし、出来もしなかつた。

初め柳營に召されて小姓組を勤めてゐた時、番頭が改役になり、新たに永井美濃守が任命された。組衆引續ぎの當日、一度だけ美濃守の邸へ顔を出したが、その後二度と平藏は行つた事がない。すると番頭的美濃守が、或る日組頭の植村隼人を呼んで、

「他の番衆は時候その他についても再三見えられるので、ほど其の顔も見知つたが、平藏だけは絶えてまゐらぬ。その爲め顔だちも好く承知しない、折々は訪ねてまゐるやう傳へて貰ひたい。」

と諭されたので、隼人は早速平藏に其の旨を云つて注意をうながした。平藏は直ぐ承知して、その翌日美濃守の邸を訪ねて面會した。そして更に其の翌日も、亦その翌日も、三日續けて彼は美濃守の邸を訪ねて番頭に面會を求め、そして云ふには、

「仰せにより、之れまで三日お訪ね 仕りました。私の面は既に御覺え下された事と存じ上げます。……私は貧しい身分で、相番の者のやうに、度々お伺ひして御機嫌を伺ふ事が出来ません、どうか悪しからず御許しを願ひます。」

さう云つて歸つたが、その後美濃守が番頭を罷めるまで、二度と其の邸へ足を入れた事がなかつた。

金 蘭 齋

徳川期に於ける老莊派の學者として、金蘭齋は名高い人であつた。

世俗に超脱してゐた人だけに、家の貧しさは言語に絶した。書籍などは一冊も持たぬと云ふ有様で、門人が「今度は何の本を御講義願ひたい」と云つて頼むと、蘭齋は何時も定つたやうに、

『拙者、その本はあひにく所持いたさぬ。』
と云つて斷る。

其處で門人たちは餘儀なく、自分たちで先生の分の本を一冊買求めて呈上して頼む。

愈よ開講の日になつて、門人たちが大勢集つて、いざ講義を聞かうと云ふ時になると、『誠に恐縮だが、御存じの通り勝手不如意のため、お贈り下さつたあの本は、一時賣り拂つて米代の方へ支拂つてしまつたので、只今持合せてゐない、……誰方か一寸其の本をお貸し下されたい。』

と云ふ。其處で餘儀なく又門人が呈上する、かうした事は常であつた。

それに、何時でもみすぼらしい汚い服装を先生がしてゐるので、見るに見兼ねて門人の誰か新しい着物や羽織などを仕立て、贈ると、蘭齋その時は非常に喜んで早速着て出ることが、二日と経たないうちに、何時か賣拂つてしまつて、また元のむさ苦しい着物に變つてゐる。

其處で門人どもが、いろ／＼考へた末、白地の着物に、脊の處へ大きく「蘭齋」と染め抜いた、丁度土方の着る絆纏のやうな着物を拵へて贈つた。それでも先生は別に氣にする風もなく、非常に喜んで平氣で夫れを着て歩いてゐた。――流石に此の着物は賣りたくとも買手が無いと見えて、何時までも着てゐた。

或る日の事、門人を集めて講義をしてゐる最中に、先生の家の前を、神樂舞が賑かに囃したて、通つた。すると先生、いきなり講義をやめて外へ駆け出し、例の染め抜きの着物で、足には草履と下駄とを片ちんばに履いたまゝ、大勢の子供たちと一緒に、ニヤ／＼笑ひながら、その神樂舞の後について何處ともなく行つてしまつた。

残された門人たちは、嘔然として見送るばかりであった。

龜田鵬齋

學は一世に秀でてゐたと共に、磊落で奇行が多かつた。

或る日の曉方、まだ東の白み渡つた頃である、鵬齋は下谷上野の下町寺通りを家路を差して歩いて来た、すると薄暗がりから盜賊が現れて出て、紋切り型で「金を出せ」と迫つた。彼は別に驚いた様子もなく、靜に懷中から紙入れを出して示しながら、

「私は今朝歸りで、一錢も残つてゐない、この通りの有様だ。」

と云つたので、盜棒も流石にあきらめたと見えて、其の上何も乞はうとはせず、また暗がりへ入つてしまつた。

凡そ一丁ばかり歩いて行つた鵬齋は、フト立止まると、何を思ひ出したか又盜棒のゐた場所へ引返して来た、そして、暗がりにひそむ先刻の盜棒を探し出し、

「先刻は氣毒をしたが……フト氣がついて見ると、私は羅紗の羽織を着てゐる、これを持つて行つたら幾らかになるであらう、これを進ぜる。」

さう云ふと、羽織をぬいであつけに取られてゐる盜棒の手に渡し、元氣好くまたスタスタと立去つた。

皆川淇園

淇園は經學文章を以つて海内に其の名を知られた人で、其の性行は酒脱を極めてゐた。或る日宇治に遊んだ。酒を好んだ彼は携へた瓢の酒を出して、四邊の風光を賞しながら、

獨り盃を口にして楽しんでゐた。

暫くして、その側に村の百姓らしい男が腰をかけて休んだ。話相手の欲しかった淇園は、その百姓に、

『お前さん酒はどうです。』

と尋ねると、村の人は、

『私も大好物ですが、御覽の通り貧しい暮しの者なので、好きな酒も飲めません。』

と答へたので、彼は早速盃をさして、

『ちやア、一杯お飲みなさい。』

と勵めた。村の人は喜んで盃を受け、互に差しつ差されつ語りながら、數十杯を過した。と、村の人は不思議さうに淇園の手にしてゐる小さな瓢を眺めながら、

『その瓢は小さいものですが、お酒はつくる事もなく出てまゐるやうです。……世の中に仙人と云ふものがあるさうですが、旦那様は其の仙人でゐらつしやるのではございま

せんか。』

と首を斜げながら、不思議さうに、でも眞面目な顔で云ひ出したので、淇園は吹き出して笑ひながら、

『ホ、ウ、仙人のやうに思へるかね、……いや、お前さんの不思議がるのも無理はない今種明しをして上げよう。』

と云つて、後向きに立つて、羽織の裾をかかげると、彼の腰の周囲には、列をなした同じ様な形の可愛い瓢が、數十箇ぶら下つてゐるのであつた。村の人は眺めて、

『ナールほど、旦那様は仙人よりお偉い。』

平賀源内

名は國偷、號鳩溪、風來山人の名が最も世に知られてゐる。一種變つた奇傑であつた。この人經濟理財の道に長じ、更に文學に秀れてゐたばかりでなく、器械の發明、物産の發見等世に傳へられるものが多い。

源内の住んでゐる家の近所に、一軒の八百屋があつた。その息子と云ふのが大分痴鈍の拔作で、親父の心配の種になつてゐた。ある夏の事、その息子を近在へ仕入れに出してやつたが、どう欺されたものか、賣物にもならない赤蜀黍を車に一荷積つけられて歸つて來た。それを見た親父の怒るまいことか、

『こんな役にも立たない物を、なんだつて買はされて來やがつた。』

と、罵りわめくのを耳にした源内は、息子の間拔けさと、親父の愚痴まじりの文句を聞ひてゐる中に、氣の毒な心も起つて、其の場に出て行き、

『よし、私が好い工夫をして賣れ口を作つてやらう。』

と云つて、まづ赤蜀黍の皮を皆にむかせ、七月の九日、所謂淺草の四萬六千日の祭日

に、親子に教へて、

『雷降のまじないぢや、くくく』

と呼んで賣らせた。その年は初夏の頃から非常に落雷が多くつて、江戸の人たちは皆な雷におびえて居た時であつたから、參詣の人たちは喜んで買つて行き、父子は一本も残さず賣り切つて思はぬ儲けに喜んだ。

——今でも、四萬六千日には、「雷除け」の呪と云つて赤い蜀黍を賣てゐるが、それは源内の奇才から沸き出た、出たらめの迷信の初めであると云はれてゐる。

大窪詩佛

近世に名高い詩人である。初め山本北山の塾に居た時、酒好きの彼は時々小さな徳利に

酒を買つて来て机の下に隠して置き、チビくくと飲んで楽しんでゐた。ある時北山先生が見つけて、

『なんだ、そんなケチくさい事をして、……その様に物を隠してチビくくやるやうな了簡では、將來立派な人間にはなれんぞ。』

と叱りつけて奥へ入つた。すると詩佛は何んと思つたか、翌日から大きな一升徳利を買つて来て、それを机の上に置き、茶碗でガブくくとやり始めた。他の門弟たちが心配してゐる處へ、先生が入つて来たが、元來潤達な北山は、それを見るとにやりと笑つた儘、何とも云はなかつた。そして夫れ以來詩佛の氣象を非常に愛したと云ふ。

その詩佛が後年大家になつて、その名が全國に知れ渡るやうになつてからの事である。ある日一人の書生が来て、その窮乏を訴へ、自分の書いたものを賣つてくれと頼んだ。すると詩佛は、

『それは氣の毒だ、では私の名を貸してやるから、近在を廻つて稼いで来るが好い。』

と云つて、なほ定紋の付いた羽織までくれたので、書生は大喜びで其の羽織を着、詩佛と稱して近在を廻り、盛んに偽作を買つて稼いだ。然し程なく其の偽物の事が露見したので、偽作を握らせられた近在の人々は、續々と詩佛の邸へ訪ねて来て、其の事情を訴へた。すると詩佛は、

『よし、眞物と換へて上げよう。』

と、直ぐに筆を執つて書いてやつたので、その人たちも喜んで歸り、それが一層詩佛の名聲を高めるやうになつたと云はれる。

江戸横綱名力士の逸話

明石志賀之助

相撲が商賣化して、木戸錢を取り、廣く一般に客を呼ぶやうになつた、所謂勸進相撲の起つた寛永時代、江戸勸進相撲の最初の最手（最高位、後の横綱大關）で、後に日の下開山の名を朝廷から頂いた名譽の力士は、宇都宮藩士山内主膳の子である明石志賀之助であつた。

身の丈、六尺五寸であつたと云ふ。

寛永元年に、上野東叡山寛永寺創建の際、地固めとして幕府の認可を受け、初めて勸進相撲が行はれたものと云はれる。第二回目は、六年後の七年三月で、それは四谷鹽町で興行された。

その上野に於ける勸進相撲で、勸進方の最手が明石で、その寄り方の最手が仁王仁太夫であつた。當時は未だ東方西方と云はずに、勸進方寄り方と云つてゐたらしい。

後年、この二人は召されて、京都に赴き、光榮ある天覽相撲をとつた。志賀之助の兄貴分である江戸の俠客夢の市郎兵衛が、彼と一緒に持つて、愈よ明日取組みと云ふ前夜、

「こんどの相撲で若しお前が負けたら、俺は二度と江戸へ此の顔を曝す事は出来ねえ、その場でお前を殺し、俺も腹を切つて死ぬぞ。」

と、涙を流し、手を握つて、志賀之助と最後の悲壯な盃を交したのは其の時の事で、この逸話は「古今俠客傳」や「近世奇跡考」に記し残されてある。

仁太夫も秀れた強力であつたに違ひない——その天覽相撲の際、オーと叫んで取組むと、

仁太夫は満身の力を両腕に注いで、ウムとばかり志賀之助の身体を、高々と差上げたのであつた。満場の観覧者は片唾を飲んで、既に勝負は定まつたやうなものであつた。夢の市郎兵衛親分も、もう腹を切る覺悟を定めたに違ひない。――「ヤツ」と云ふ聲が發せられた。仁太夫は志賀之助を投げたのである、その切那「ウオー」と云ふ悲痛な叫び聲が土俵から聞えた。と、不思議や土俵の砂に倒れたのは志賀之助に非ずして、仁太夫であつた。沸き上る歡聲のうちに志賀之助は勝名乗を受けたのである。早業の彼は、投げられながら身をひるがへすと、落ちざまに仁太夫の胸を蹴つて倒し、彼は自若として土俵の真中に突立つてゐたのである。

相撲道の名手、第一人者として、彼は其の時から日の下開山を名乗る事を許されたと云ふ。

花の鐘つかねばならぬ氣色かな

この句は、志賀之助の風懷をゆかしむものとして今に傳へ残されてゐる。

兩國棍之助

勸進相撲の時代になつてからの、第一世横綱を明石志賀之助とすれば、兩國は第二世の横綱である。

身の丈六尺一寸五分、體量四十貫、因州の生れであると、記録されてゐる。

元祿十三年、糺の森の東、高野原赤宮の勸進相撲の折、彼は勸進方の大關であつた。

――「角前髪の角力取、櫛をさす事元祿年中に盛んにて、兩國より始まる」と某書に傳つてゐる、櫛は彼が差し始めたものらしい。

或る夏の夕ぐれであつた、相撲が果てゝから、兼て最眞を受けてゐる新田村の豪農某の家へ、ぐりり方の大關御用木無次右衛門と一緒に招かれて行つた。

その家の主人は、力士たちへの馳走のため、特に大きな据風呂を作つて置いたので、早速それに湯を沸し、「まづ一ぱい入つて汗を流しなさい」と勧めてくれた。其處で最初に御用木が馳走を受ける事になった。

御用木も兩國に劣らない大男であつたが、樂々と湯槽につかつて、好い氣持になつてゐた。すると一乗寺村の方から、一人の百姓が牛を連れて歸つて來たが、別拵への大きな据風呂が、丁度通路に當る其の家の門口に置いてあるので、牛を通す事が出來ない、それで牛飼が、

「濟みませんが、どうか其風呂桶をどうかして下さい。」

と、湯に入つてゐる御用木に頼んだ。彼も尤もな事と思つたので、風呂から出ようとする様子を、座敷から見つてゐた兩國が飛び下りて來て、

「よしッ、私が其の儘退けてやらう。」

と云ひながら、御用木が中に入つてゐるまゝ、その風呂桶を輕々と持上げて側の方へ取

り退けた。それを見てゐた牛飼ひは、怪物とでも思つたか、顔色を蒼青にして震へながら逃げ出して行つたと云ふ。

丸山權太左衛門

三代目の横綱格の力士である丸山は、仙臺の生れで、身の丈六尺五寸、體量四十三貫と記録されてゐる大男であつた。——今に丸山の手形と云つて傳へられてゐるものは、指先までの長サが曲尺八寸、幅は長い處が四寸からある。享保年間に名を現はした大關である。忠山公（仙臺、伊達）が藩主であつた折、大男丸山は江戸見物に出かけたいと思つて、ある家老衆の家來にして貰つて、殿様參勤の折お供をして江戸に上つたが、道下手の上身は重いし、毎日二足づゝの草鞋を踏み切つてしまふ、しかし彼の足に合ふやうな大きな草

鞋は何處にだつて賣つてゐないから、宿へつくと夜なべに自分で翌日の二足分を造らなければならぬ。この草鞋を造り上げる時分には、いつも早や曉方の御供揃ひの頃になるので、ゆつくりと眠る暇も無い。

それが毎日の事で、疲れ切つて馬に乗らうとすると、足が下へついて馬が歩く事が出来ないといふ始末で、詮方なく仙臺から江戸までの道中、終日歩き、終夜草鞋をなひ、夜も眠らず、漸く江戸へついたらと云ふ苦しい憂目を見た。——これでは、歸りの道中が思ひやられると、とうとう江戸に止まる決心をして、相撲になつたのだといはれる。

或る年、此の丸山が、大阪天満川崎の豪商吉田氏に招かれて行つた事がある。その折吉田の主人が、

「關取は一體どの位力があるのか、見せて貰ひたい。」

と云はれたので、彼は、座を見廻したが、折から其處に笥竹にするための、太い青竹があつたのに眼をつけ、立つて行つて夫れを手に取り、兩手に握つて、グツとねぢると、さ

しもの太い青竹がねぢれてしまつた。

主人も聞きしに優る力量に驚き、それを永久に記念しようといつて、そのねぢられた竹の上下を切り、風流な花入れに作り、「丸山筒」と銘をつけて、今に傳へ残されてゐる。

丸山は強力のみでなく、風雅の道を解してゐたと見え、俳人蓼太の撰にある「蓮華全集」に、彼の自作として、

一つかみ いざまわらせん年の豆

の句が載せられてゐる。この句は節分の折自分の手形を押したものを、上に記して、知人に配つたものだといふ。また當時米仲と云ふ俳人は、彼の手形の上に、

手の平の 牛若丸のお雛かな

と贊した。偉大な手の持主として、彼の手形は當時世間の評判になつてゐたものであつたに違ひない。

釋迦ヶ嶽雲右衛門

大男丸山から降つて二十餘年の後、即ち天和年間に更に巨人が現れて世人を驚かした。それが釋迦ヶ嶽である。身の丈七尺餘寸——この人の身の丈石と云ふのが、今に深川八幡宮の境内に残つてゐると云ふ。

この釋迦ヶ嶽、ある朝の事、朝寝をしてゐる豆腐屋を起すのに、二階の戸を叩いたと云ふ話が残つてゐる位である。

森山孝山の隨筆「賤のおだ巻」に、彼の事で興味深い記事が載せられてゐる。——ある日の事森山翁が番町邊へ用達しに行き、麴町五丁目通り紀州侯邸の達磨門の前へ來かゝると、二三丁先におびたゞしい人の群が集つて行くのが見えた。段々近づいて見ると、その

群衆の中から、一人腰から上が現はれて進んで行く姿が眺められたので、さては拵へ馬に乗つて行く人であらう、その足取の美事さに人が集つてしたひ行くものであらうと思つた。なほ急いで坂を下りて、雲州侯邸の前まで行き、その廣場の處で人に尋ねると、その馬に乗つて行くと思つた人は、當時有名な釋迦ヶ嶽と云ふ相撲取であると聞かされ、今更に肝をつぶし、彼が大男であるのに驚き感じたと云ふ。

彼は、雲州の生れで、安永三年の番附には西の關脇であつたと云ふが、彼の聲名は大男であつた事で一層高かつたらしい。

谷風梶之助

正式の横綱免許を受け、今に小唄の「我が國さ」に、昔谷風、いま伊達模様……と

唄ひ残されてゐる名譽の力士である谷風は、仙臺の生れで、丸山權太左衛門の後二十餘年に現れた。身の丈六尺二寸五分、體量四十三貫と記録されてゐる。「肩の厚さ三尺、色白く眼清く、風采古今を壓す」と記されてゐる名力士であつた。寛永三年八月奥州宮城野に生れ、明和六年力士となり、秀の山と稱し、後伊達關と改め、安永五年十月二十七歳の時谷風の名に改めたのである。十九歳の時、郷里で鬪牛を引分けたと云ふ豪力の逸話が残つてゐる。

當時、本所近くに越前屋と云ふ搗米屋があつて、其處に獨りの道樂息子があつた。親父が死んでからは、打つ飲み買ふと云ふ三拍子そろつた放蕩で、商賣などは其方のけ、店は衰微するばかりで、母親は常にそれを苦にして惱んでゐた。

その馬鹿息子が、なにを考へたか店の土間へ米俵を一つころがし、店の前を通る力士があると、呼び込んで、

「この俵を上げた人には、この米俵をくれてやる、もし持上げられなかつたら、此の

櫓の棒で三つ叩くが、やつて見ないか。」

と云つて勧めた。力士たちは、高が米一俵ばかり持上らぬ者はないので、慾と二人づれで、その俵に手をかけて持上げようとするが、どう云ふ譯かビクとも動かない、先づ最初の力士は馬鹿息子から櫓の棒を三つ喰つた。それが評判になつて、力を商賣にする力士たちは、後から後から幾人が行つて持上げようとしたが、何れも徒らに櫓の棒で叩かれるばかりであつた。中には、何か俵の中に他の物が入れてあるのでは無いかと疑つて、調べて見た者もあつたが、やはり俵の中は米ばかりで怪しい事もない。かうして馬鹿息子は、來る力士たちを櫓の棒で叩いて、獨り鼻を高くして威張つてゐた。

この噂が、當時大關の谷風の耳に入つた。然し彼は弟子たちの話を聞いても笑つてゐるばかりであつたが、その中或る日の事、谷風が弟子を連れて用足しの歸りに其の米屋の店の前を通ると、中から息子が眼早く見つけて、

「谷風關、一つ此の俵を動かして見ないか、だが若し持上げられなかつたら、關取は大

關の事だから、櫛の棒で五つ叩くが好いかね。」
と云つた。谷風は笑ひながら店へ入ると、

「だが若し私が持上げたら、あなたの首をもらふが好いかね。」

と云ひながら、やがて俵の側へよると、両手をかけ、ウーンと力を入れると、ズル／＼と米俵を持上げた。馬鹿息子は青くなつて震へ出した。それも道理、米俵には六尺近く地の中へ打ち込んだ松の丸太がく／＼りつけてあつて、それが一緒に引き抜かれて持ち上つたからであつた。

「こんな悪戯をして、何も知らぬ力士たちを叩いて遊ぶとは何と云ふ事だ。さア、こんどは私があなたの首をもらつて行く。」

と谷風が云つたので、息子は地べたへ腰を抜かして青くなつてあやまつた、其處へ母親も出て来て、共に息子の不都合を詫言びた、

「噂によれば、あなたは道楽三昧に日を送り、店の仕事もせず、阿母さんを泣かしてゐ

なさるさうだが、今日から以後は、この谷風が阿母さんの味方になつて、商賣を一生懸命にやらず、道樂をやめないと、何時でも来てあなたの首を引き抜くぜ。」

と、言葉を極めて強意見をしたので、息子もすつかり改心し、その後は母親の命令もよくきき、商賣熱心な孝行息子になつたと云ふ。

彼は、寛政元年に我が國最初の公式横綱の免許を受けたが、同七月悪性な流行感冒に罹つて世を去つた。當時の人が、その流行した感冒の事を谷風と云つて怖れたと云ふ。

雷電爲右衛門

信州小縣郡大石村の生れで、身の丈六尺五寸、寛政八年三月に大關に昇り、十六ヶ年の長い間其の位置を保つてゐたと云ふ、稀代の怪力士である。彼は立派に横綱になれた人で

あつたが、何う云ふ譯か自分でならなかつたのだと云ふ。

初め小野川喜三郎(横綱)に弟子入りをしようとして訪ねて行つたが、その折小野川が横に寝そべつた儘挨拶をし、且つ侮蔑の言葉を浴せたと云ふので、その儘其處を去り、谷風の許へ行つて弟子となつた、そして天下に知られた大力士となつたのである。後年小野川と取組んで之れを倒し、昔の恨みを報ひたが、その爲め小野川は抱へ主人の有馬侯の出入りを禁じられる事になり、茲に兩力士が血の雨を流さうとした話は、講談によく演じられてゐる處である。なほ此の小野川は谷風の好敵手で、江州大津の生れ、寛政二年三月に大關となり、次いで横綱となつた大力士である。

雷電は、その力士の生涯中、三つの手を封じられてゐた。その一つが有名な張手で、淺草八幡境内相撲の折、平手で相手の八角政右衛門を張殺してから、その手を用ゐる事を封じられた。如何に強力であつたかが察せられる。その張手に就いて、彼の洒脱な性格の一面を知る興味深い逸話がある。

當時は最も相撲道の盛な時で、寛政三年六月十一日には、千代田城吹上の庭内で、十一代將軍家齊によつて上覽相撲が催された。その折雷電は陣幕島之助と取組む事になつた。

その日、控への部屋にゐる時、雷電は笑ひながら、相手の陣幕に向つて、『今日は上覽相撲で、俺は是非勝たなければならぬから、張手を使ふぞ。』と云つて脅した。然し、本心から封じられてゐる張手を使ふ考へなどはなかつたのである。

——さて愈よ番數が取進んで、雷電と陣幕と土俵に相對峙する時が來た。行司の引く軍配と共に、ヤツと云ふと二人は立上つた。その刹那、陣幕はいきなり張手を用ゐて雷電の顔を張つたのである。これには雷電も少なからず面喰つたに違ひない、たじろぐ處を寸隙も與へず、攻め立てられて、雷電は遂に土俵を割つて敗れた。——陣幕は、相手の封じ手を巧みに利用して機先を制し勝を得た。

この折負けた雷電は、さぞ恥しさうな顔附や様子をして土俵を下るであらうと、見物の

人々は考へてゐたのであつたが、彼は洒然々とした態度で、顔には微笑さへ浮べ、

「今年や負けても、雷電(來年)は勝つ。」

と洒落を云ひながら土俵を下りて行つたと云ふ。彼の勝負を度外した、剛快で颯逸な風格の現れとして、今に傳へ残されてゐる。

稻妻雷五郎

常陸の國の生れで、身の丈が六尺二寸。文政四年卷島才助の名で西の方二段目につけ出され、同十一年大關に進み、十二年横綱を免許されて、雲州侯のお抱へ力士で、天保十年に廢業し、明治十五年三月二十九日に八十八歳で世を去つた、力士界稀有の長壽者である。彼は「待つた」が嫌ひで、殆ど一生待つたをした事がなかつたと云ふ。

腕押しにならでや涼し雲の峰

雲を抜く力せまれり時鳥

の句が残つてゐる。

この稻妻の最眞先に、青山の質家某があつた。その店の間に、唐金の厚板で造つた磐石のやうな嚙獅火鉢が置いてあつた。彼は其の家へ行くと、何時も其の火鉢を左の手に持ち、輕々と胸のあたりまで持上げ、右手で口にくはへた煙管でもつて、靜に火をつけて喫むのであつた。

その火のつけ方が、如何にも輕々と、煙草盆でも取扱ふやうに、大の男でも一人では持上らない唐金の火鉢を、あまり雑作なく扱ふので、其の家の主人も少し癪に障り、ある時小僧に云ひつけて、當時通用の天保錢數十貫文を火鉢の底の方へ入れさせ、その上へ奇麗に灰をかぶせて置いた。

二三日の後、稻妻が訪ねて来て、やがて其の火鉢の側に坐り、何時もの通り煙管を出し

たので、主人も今日は何うかと興味を持つて、じつと様子を眺めてゐると、彼は無難作に其の火鉢に手をかけ、何時もの通り軽々と持上げて火をつけたので、主人も今更ながら其の計り知れぬ力に驚きながらも、何喰はぬ顔で、

「關取、今日の火鉢は、ちつと重くはなかつたかね。」

と尋ねると、稻妻は首をかしげながら、

「さう仰しやられると、ちつとは違つたやうにも思へますが……」

と、別に、大した變りも無いやうに云つたので、主人も一層敬服し、兼ての計略をすっかり話して聞かせた上、

「關取の力にはつくづく感心した、どうせの事に、その天保錢を入れた儘火鉢は進上するから、持つて歸つて下さい。」

と云ふと、稻妻は大喜びで、その夜の歸途、火鉢を繩でからげると、軽々と片手にぶら下げて歸つて行つた。

不知火光右衛門

肥後菊地郡の生れで、初め殿と云つた。細川侯のお抱へ力士で、谷風から八代目の横綱を免許された人である。明治十二年二月に世を去つた。

この不知火は、非常な美貌の持主で、殊に性來愛想の好い人であつたので、最負の客も多く、藝妓遊女などは争つて彼の一枚刷の似顔錦繪を買ひ求めたと云ふ。それほど全市の人氣をあほつた近世の名力士であつた。

然も、彼の妻女と云ふのが、非常に貞實な女で、弟子達の世話も好くしたので、門弟や出入りの者からも非常に懐しまれた。また良人が偶々勝負に負けた時などは、心をこめて酒などを勧め、良人が寝に就いた後、甲斐甲斐しく裳をからげ、不動尊へ參詣してお百度

参りをなし、明日の勝を祈つたと云ふ。それに就いて美しい逸話が角界に残つてゐる。

不知火は、當時横綱として全勝の榮冠を頂いてゐたのであるが、どう云ふ譯か當時前頭にゐた陣幕久五郎（九代の横綱）には、時折思はぬ負けを取つた。不知火の妻は之れを非常に残念に思つて、どうかして良人に勝たせたいと念じ、場所になると、本所一つ目の自宅から、吹雪のなかをも冒し、寒三十日の間、毎朝淺草藏前の不動尊（深川不動の舊鎮座）へ日参し、一心不亂に祈願をこめるのであつた。

不知火の妻が、かうして日参するため横綱町を往復する姿を、毎日自分の部屋（秀の山）の二階の窓から眺めてゐたのが、相手力士の陣幕久五郎であつた。陣幕は兼てから人の噂で、それが自分に對して良人を勝たせやうための、不知火の妻が祈願の通ひ路姿である事を知つてゐた。彼はしみじみと其の敵手の妻の心根に涙ぐまれるのであつた。然し自分の勤めには一步も譲る事は出来ない。陣幕は殊勝な不知火の妻に感激すると同時に、自分も毎朝曉に起き出で、冷たい水を四斗樽に三四杯づゝあびて身體を清め、それから屋根の

火の見櫓に上つて、遙かに昇る日輪を遙拜して天運を祈る事を忘れなかつたと云ふ。

陣幕久五郎

出雲の國に生れて、谷風から六代目の横綱秀の山雷五郎の弟子となり、阿州侯のお抱へ力士であつた。慶應二年西の大關に昇り、次いで九代目横綱となつた。

十四歳の時、力士にならうと志し、同じ村の若者頭である長島茂三郎と云ふ人に相談をする。

「お前のやうな小膽者がなんで天下の力士になつて、三段目までさへ取り上げて行けよう。もしひよつと名を知られるやうな力士になれたら、二つとない俺の首をやつても好

と云つて、頭から嘲り笑つた。陣幕は其の恥しめた言葉を聞くと、口惜しさに涙を流したが、じつと無念を堪えた。それが彼を發奮させる動機になつた。

その後大阪に上つて朝日山廣右衛門の弟子となり、あらゆる惨苦の修業に面しても、嘗て嘲笑つて耻しめられた村の若者頭の言葉を想ひ起し、一心不亂に稽古を勵んだ。そして更に江戸に出て秀の山の門に入つたのである。

彼が入幕して、その名が世に知られた時、巡業の途次郷里に立寄つて、その當時の若者頭であつた長島を訪ね、

「俺が子供の時、お前は俺が名を知られる力士になれたら首をやると耻しめた事を、まだ忘れはしまい。さあ俺は立派な關取になつて歸つて來たんだ、約束のやうにお前の首を貰はうぢやないか。」

と云つたので、その男は蒼くなつて震へ上り、土地の顔役なども出て彼に詫びたので、漸く無念を晴して命は助けた。そして其の後は、自分の出世の動機を作つてくれた恩人だ

と云つて、永く其の男の面倒を見たと言ふ事である。

「待つた」の始り

享保の頃、初代谷風が、大阪で大關になつて九年勝通し、勇名天下に浴く、十年目には日下開山の横綱を張らうと云ふ場合になつた。この時或る富豪があつて、當時賣出しの八角と云ふ力士に、懸賞を出し、もし今度谷風と取組んで勝を取つたら、褒美に町屋敷を二軒もくれて一生安樂に暮させる約束した。八角はこれまで一度も谷風に勝つたことがないので、尋常一樣の手では、到底勝てないと知つて、何とかからまい工風はないかと肝膽を砕いた結果、いよいよ取組に際し、谷風が仕かけるとは「待つた」と云つて度々待たせ、谷風が焦らされて堅くなつた所を、虚を狙つて勝つことが出來たと云ふ。

これが今日の「待つた」の抑もの始りで、古法には決してない、卑怯のことであるが、今はそれも規則の如くなつてしまつてゐる次第である。

古今人氣名優の逸話

三代 瀨川菊之丞（濱村屋）

大阪道頓堀の生れであるが、名を成したのは江戸であつた。安永より文化にかけて立女優として、その美貌と女性らしき仕草に、當代第一の名優と稱へられた。

彼が如何に江戸に於いて高評を得てゐたかと云ふ事は、當時殆ど前例の無かつた兩座駈持を屢々やり、報酬の如きも彼が死去の前年（文化五年）には、同代比類なき一ヶ年千八百兩の巨額を得てゐた事でも知れよう。従つて多くの富を積み、家屋地所等を澤山有つて

たとの評判があつた。

享和二年に大阪へ上る途次、伊勢の古市で「無間の鐘」を演つた際、その役梅川で、石の手水鉢に向つて、三百兩の金が欲しいとかこち恨むくだりの時、見物の中から、

「そないお金が欲しけりやなア、江戸の屋敷を賣つたら何うや。」
と半疊を入れたものがあつた。と彼は、

『と云うたとて、今宵の間には合ひませぬ。』

と狂言ながらに答へたので、人々は其の落附と頓智に感じ、やんやと喝采し、それが非常な評判になり、その折京阪に於ける彼の人氣が一層高まつたと云ふ事である。

彼は常に舞臺に於ける心得に就いて、こんな事を云つてゐた。

「舞臺に出た際は、相手の色々な仕打のうち、その脇で何も云はず手を束ねてゐる時でも、其の相手の仕打に眼を放たず心をつけて居らねばなりません。そんな譯で私は舞臺から棧敷の方などは見た事がありませんから、御最負の方の御見物も知らぬ勝です。役

者は舞臺へ出たら、その役から氣を放れぬやうに心懸けるのが大切です。」と。

五代 目 松本幸四郎 (高麗屋)

幸四郎は鼻高く、眼が窪み且つ瞳が小さくて凄味のあるのが特色であつた。初めやつし方(濡事師)を専門にしてゐたが、後に實惡に轉じ敵役を演出して一層名聲を擧げた。彼は當時の名優であつたのみならず、近世の名優團十郎並に菊五郎を生み出した源流をなしてゐると云ふ點で、劇壇の功績者と稱へられてゐる。

後年彼の最も喝采を博したのは、其の凄い睨みであつた。文政三年の頃、彼が大阪へ上り、中座に出演して二代目嵐吉三郎と一座した時の事である。

幸四郎はむしりの鬘、肩入物の寛博、三尺帯、いがみの權太のやうな惡者、吉三郎は浪

人者で、紫の長褌のかゝつた着關、これもむしりの鬘、好い男振りであつた。幸四郎が強請の件になると、吉三郎の浪人は之れを受附けず、科白渡つて「茶でも飲んで歸らつしやい」と立上り、唄になつて入る。初日は大受けであつたが、さて二日目に又此の件の見得になると、見物は吉三郎を褒めず「高麗屋、高麗屋」と呼び立てた。吉三郎不思議に思つて、舞屋へ歸つてから弟子共に尋ねると、

「初日は師匠が後向きで振向り——茶でも呑んで歸らつしやい——の處で、幸四郎は仰向いてゐましたが、餘り見物が岡島屋岡島屋と云つて師匠ばかり褒めたので、二日目は、幸四郎が懷中から吠萋入を出し、舞臺へ打ちつけました、この音に見物が眼をつけると、上座を見込んで横向きに睨みましたが、その横向きの鼻の高さ、眼の凄さ、思はず見物は高麗屋々々と云つて、師匠が居るか居らぬかのやうに申しました……」

これを聞いて、吉三郎は驚き「成程藝は上があるものだ」と感心し、幸四郎に嘆願して、翌日から其の睨みを止めて貰つたので、再び吉三郎の聲がかゝるやうになつたと云ふ事

ある。

彼は舞臺に於ける敵役に似ず、お人好しで、金錢に淡泊な人で、子供のやうな無邪氣さがあつた。錢勘定などは殆ど知らず、十二銅は神棚に上げる故四文錢三つと覺えてゐると云ふ程度で、金錢は手に乗せぬ位の人であつた。

或る日、給金の渡りの事で、今日の話の付かぬ中は、決して樂屋入りをせぬやうに云つて奥座敷に居らせ、妻君が別室で表方と掛合つてゐる内、庭口から密と抜け出して樂屋入りをし、舞臺へ出てしまつた。後で妻君が腹を立て、

『それでは、表方の者が馬鹿にいたします。』

と云ふと、

『さうでもあらうが、見物に來たお客に濟まぬから抜けて出た。』

と云つたと云ふ逸話のある位である。

五代 市川團藏 (三河屋)

「澁團」と云はれて人氣を博してゐただけに團藏の藝風は地味で澁かつた。彼は藝風科白ばかりで無く、化粧着附などの上にも、當時の歌舞伎に通弊であつた誇張浮華を忌み、眞實を寫し出さうと努めた。彼が熊谷に扮した時、今までと違つて餘り顔が赤くないので、或る人が側から注意すると、

『お前さん、熊谷にお近附きだつたか。』

と、皮肉つたと云ふ話が残つてゐる。

又、石川五右衛門の芝居で、彼が久吉を演り、五右衛門は當時第一の名優と云はれた七世仁左衛門が扮したが、その折山門の場で、五右衛門が手利劍を打つて、久吉が柄杓で受

止め「順禮に御報謝」と云ふ時、彼は見得も切らず、何にも仕草をせず、身に少し屈め、顔を見せぬやうにした處、見物が喝采して止まない。五右衛門の仁左衛門が怪しんで、弟子に云ひつけて久吉の様子を見させ、その話を聞いて、始めて手を打つて感心し、

「俺は大きな男だし、團藏は小柄な男だから、なか／＼見後にしても俺には叶はない、其處で奴は自分を知つて、わざと顔を下へ向けて見物に拾はれて譽められるとは、天晴れな名人だ。」

と云つて激賞したと云ふ。

三代 尾上菊五郎 (音羽屋)

文化より嘉永にかけての、唯一の和事もしくは實事の名優であつた。即ち五代目の實の

祖父に當る人である。

故黙阿彌翁の話に、彼が未だ若かつた頃、ある日樂屋の鏡臺に向つてゐたが、我知らず「俺は何うして斯う好い男だらう」とつぶやいたのを、側に聞いて居た者が可笑しいもと思はず、「誰が見ても眞實に好い男ですから、親方自身がさう思ふのは尤もです」と、心から眞面目にさう答へたと云ふ。それほど彼は容貌と風姿に秀でゝゐたのである。

彼は意匠に長じ、故實に通じ、且つ技藝に熱心であつた。彼が得意の一つであつた「四谷怪談」のお岩を演つてゐた或る日の事、舞臺へ通ふ暗い奈落を行く時、お岩の姿で弟子の小的藏に向ひ「恐いか」と尋ねると、「毎日の事ですから別に恐いとは思ひません」と答へると、「さうか」と云つて何氣ない様子であつたが、暫くしてそつと隅へ隠れ、小的藏が探してゐる處へ突然お岩の顔を出すと、小的藏は思はずキヤツと云つて眼を廻してしまつた。穴番の者が介抱して兎に角息は吹返させたが、聽て舞臺を濟ませて歸つて來た菊五郎は、紙入から金を一分出して小的藏に遣り、

「恐いと云へば夫れで安心して舞臺へ出るのを、恐くないと云はれては氣が抜けるから、それで脅かして見たのだ、これは眼の廻し賃だ。」と云つて渡したと云ふ。

彼のお岩は實に至藝であつたらしい。當時相手役の伊右衛門は名人七世團十郎であつたが、お岩の亡靈が石地藏を渡し、顔を覗き込んで「エへ、へ」と笑ふ様の物凄さに、何うしてお岩の顔が見ておられず、「それでは情がうつらないから、俺の顔を見てくれ」と、幾度も菊五郎が團十郎に注文したが、何時も自然に顔をそむけるので、遂には彼が怒つてしまつたと云ふ話がある。

また次の時、關三十郎が伊右衛門を勤めたが、蛇山庵室の場の、餘りに恐ろしさに、終に病を得て舞臺を休んだと云ふ。

何事にも物に凝る性質であつただけ、小道具や持物は勿論、さまざまな事に研究、工夫をして、新しい意匠をつくり出した、音羽屋一家は代々かうした性格の人が多いらしい。

四代 阪東三津五郎 (大和屋)

晩年中風を病み歩行の自由を失つたところから「よひ三津」の綽名を受けたが、和實と所作とに長じ、その輕妙なる舞臺の味は、時の名優六世團藏若しくは四世彦四郎を凌駕してゐると云はれた。尙ほ文筆の才を有し、頗る機智に富み、且つ氣骨があり、江戸ツ子氣性の喧嘩早い、役者に似合はない氣概と膽力の持主であつた。

ある時魚河岸の者に、何か悪感情を抱かせた事があり、同所の連中が一つ大和屋へ毒突いてやらうと二三十人土間へ陣取つたが、早くも夫れと三津五郎に注進した者があつた。すると彼は何を思つたか、幕の明く前に舞臺へ出て行き、幕の切れ目から樂屋拵への顔を差出し、土間の連中をズツと見渡したので、河岸の若い連中も其の意外な行爲に面喰ひ、

呆然として眺め返してゐると、彼は突然、

「見や、今日は大變雜魚が入りやがつた、こゝへ一網打つたら好からうになア。」

と云ひながら顔を引込ませたので、流石氣負の若衆達も毒氣を抜かれ、何事もなかつた中に、仲へ立つて口を利く者があり、無事に納つたと云ふ。

また仲仙道を旅した時、多くの雲助が役者と見て強請初めたので、附人が幾らか酒代をやつて濟まさうとした處、弱味につけ込んでぐづく云つて承知しないであると、それを見た彼は、いきなり肌拔ぎになつて、

「どうとも勝手にしやがれ。」

と、傍の辻堂へ大の字になりにふんぞり返つたので、流石の雲助も驚き、僅かな酒代で事済みになつた。

彼は和歌にも堪能であつたが、その作に數字かくしの歌がある、また一面を知る事が出来やう、その一つを記す。

「霜夜」

八萬三千八 三六四 三三四九 一八二 四四十二 四六九 百四億四萬

七代 目 岩井半四郎 (大和屋)

俗に「紫若半四郎」と賞へられた名女形であつた。明治初年其の名を謳はれた半四郎は八代目であり、彼の實子である。

古書に彼を評して「眼附最もよかりき、青ぶくれと云ふ顔なれど、舞臺にては如何にも美しく華なる女形にて、脊は高く、身體も随分大きかりしが、娘形も傾城も藝者も、世話女房も皆よき風なり、調子は高き方、臺詞廻し極めて上手にて、音聲露をふくみし處あり」と記されてある。行く處可ならざるなき優であつたらしい。彼は頗る皮肉家で警句を

吐いた。それに關した逸話が澤山残されてゐる。

ある時、彼が「國姓爺」樓門の場で、錦祥女を勤めた時、唐人の役は樂屋總出で、毎日夫れぞれ顔の隅取りを變へ、道化たつくりをして出たが、その内餘り興に乗り過ぎ、中村鴻藏と云ふ役者が、小道具部屋から金箔を持つて來て顔一面に箔を置いて出場した、それがピカ／＼光る爲め、見物も役者も大笑ひをしたが、幕になると彼は作者を呼び寄せ、「私は未だ唐へはまゐりませんから、唐人に近附はないが、彼方の國には金の顔があり、ますかお調べ下さう。」

と云ひ出したので、作者も返事に困り、直ちに表方へ申し出し、鴻藏は大しくじりで、頭取表方一同から揃つて詫に出た。すると彼は眞面目な顔で、

「いえ／＼決してお詫には及びません、随分金の顔もあるでせう、此のお仕切場には鐵の顔の方もありますから……」
と云はれ、一同愈よ痛み入つたと云ふ。

代先 市川左團次 (高島屋)

江戸子に最も人氣を博した近代の名優である。明治二十一年五月千歳座で、初めて新七書き下ろしの「籠釣瓶花街醉醒」を演つて多大の好評を得、連日満員の盛況を來した時の逸話である。

主人公の佐野治郎左衛門をする左團次は、豫て此の次郎左衛門が類ひ稀な醜男と云ふ事を聞いてゐたので、その顔の拵へに苦心研究をしてゐる最中の事であつた。當時の劇評家の團體である六二連の梅素薫からの使であるとして、書面を持つて訪ねて來たのは、一豊と云ひ俗に「市場豊」と云はれる畫工であつた。取次ぎの弟子から手紙を受取つて左團次が開いて見ると、

「次郎左衛門の顔の拵へ御工夫中と承り、参考の爲め好い器械を御覽に入れ候」云々と書いてあつたが、他に器械らしい物も添へて無いので、怪しみながら兎に角其の使の人を稽古場へ招き入れた、すると其の一豊は臆面も無く大勢の前を通つて彼の前に近寄り、鹿爪らしく威儀を繕ひながら、

「御参考のため、生きた器械を御覽下さい。」

と顔を突き出したので、つくづく眺めると實に絶世の醜男で、二目と見られぬ化物の如き面相なので、左圍次膝を叩いて大いに喜び、

「わざわざ御見せ下さいまして、御苦勞様でした。」

と云つて厚く禮を述べ、三枚ばかりの幣紙を包んで謝禮に與へたと云ふ。

處が、その翌日「佐野の旦那様へ」絹市場より」と記し、「お茶請に聊か趣向も附焼双、名物八幡麻土——籠詰一個」と書き、大橋の八ッ橋團子を贈つて來たので、彼も一豊の酒脱さに感じると共に、好い参考を得たのを喜んださうである。

九代 市川團十郎 (成田屋)

明治劇壇の大立物、所謂團州の逸話美談は、既に多く書き残されてゐる、で、茲には彼の性格の一面と權勢の一端を窺ふに足る、面白い笑話を紹介して見よう。

明治十七年一月、市村座で河竹新七作の「種瓢眞書太閤記」を出した時の事である。初め彼は「築地から通ふのだから、朝の序幕だけは助けてくれ」と云ひ出して、表方の者を困らせたが、その後序幕へ關三十郎が伊東日向守として出るのを聞き、急に乘氣になり、「よし、俺も出る」と云ひ出したので、表方は初め愚圖ついた彼が、意外にも容易く納つたので、安心すると共に不思議がつてゐた。

扱て愈よ芝居が明き、序幕で關三十郎の日向守が落馬して、其の止めを刺す件になつて

藤吉郎の彼は鎗でもつて無暗に日向守の擧丸をつゝく、三十郎は弱つて「あゝ、いけません、くゝ」と小聲で云ふと、彼は尙ほ面白がつて毎日同じ悪戯を繰返してゐたが、或る日三十郎も蟲の居處が悪かつたと見えて、彼が例の如く鎗で突き初めると「オイ好い加減にしてくんねえ、俺だつて役者の端くれだ」と云つて腹を立てた。彼は其の日部屋へ歸ると、直ぐ座主の中村善四郎を呼び寄せ、

「俺が序幕へ顔を出すのは、其の爲め餘分のものを貰つてゐる譯でもなし、只だ關三の擧丸を突くのを楽しみに朝早くから眠いのを堪えて出て來るのに、今日のやうに先方から開き直られてカスを出されては、俺の役徳が無くなるから、もう明日から序幕は眞平御免だ。」

と斷つたので、座主も非常に困り、結局三十郎から詫びをさせて出て貰ふ事にした。そして彼は相變らず毎日、三十郎の擧丸を突つて止めなかつたと云ふ。

五代 尾上菊五郎 (音羽屋)

明治三年三月、守田座で二番目に「助六」を出した。助六は元來市川家のものではあるが、古くは中村家でも勤め、文政二年には尾上でも勤めた例があるので、その際座元守田勘彌のすゝめで助六を菊五郎に、意休を芝翫に勤めさせる事にした。

處が當時有名な喧しやであつた芝翫の母が苦情を云ひ出し、「如何に狂言とは云へ、當時並び無き人氣のある芝翫として、後輩の菊五郎如きに下駄を頭へ載せられるのは心外だ」と云つて何うしても納らない。其處で座元も當惑して、窃に作者の河竹を招ぎ、何とか工風がないかと云ふ相談した結果、台本を書き替へる事とし、即ち菊五郎の助六が下駄を持つて立ちかゝると、

皆々「助六さん其の下駄を何うしやんすぞへ。」

助六「どうするものか、お定りの意休の頭へ載せるのだ、然し俺が載せたら、御最負多
い成駒屋、ふだん兄貴とたてる中、こいつア役でも……」

と、下駄を放り出し、両手で塵を拂ひ、

……載せられねえわえ。」

と改めた。此の妙文句が河竹の名案通り見物に大受けて「音羽屋々々」の掛け聲がおび
たゞしかつたが、それに引替へ芝翫の方へは一人も聲を掛ける者がなく、非常に見劣りし
たので、芝翫の母も今更後悔し、また人を仲に立て、「やはりお定り通り、駒下駄を載せ
て貰ひたい」と、菊五郎へ交渉したが、

「そんなに採まれては、俺がたまらねえ。」

と一笑の上拒絶したと云ふ事である、兎に角彼の當時の人氣が察せられよう。

代先 中村芝翫 (成駒屋)

前項の話に出た芝翫は、今の歌舞伎座技藝員長中村歌右衛門の養父であるが、近世を通
じての名優であつたと共に、奇行の多かつた人である。

當の芝翫は、藝事以外には、まるで子供のやうに無關心で、金の勘定などは丸で分らず、
表方仕打との交渉などは、皆な母親や内儀さんがやつて居た。十錢の銀貨が光つてゐて奇
麗だからと云つて、十圓のお札と取代へたと云ふ話が残つてゐる程である。

この芝翫は火事が大好きであつた。ヂヤンと半鐘がなると、もうジツとしてはゐられな
い。——或る夜も、半鐘が打ち出されると、早速火事装束に身をかためて飛び出した。そ
の歸途の事である。少し遠方だつたので、途中で大分腹が減つて來た、そこで往來の蕎麥

屋へ入つて一杯食べた。

『オイ、幾らだい。』

と聞くと、

『八文です。』

と云ふ、だが、芝翫には錢勘定が分らない。そこで絆纏の井から出した一分を、其處へ置くとサツサと出て行つた。而喰つたのは蕎麥屋で、八文の代に一分では餘り多すぎるから、釣錢を渡さうと思つて、

『もし〜。』

と呼び止めると、お客の芝翫は、急に狼狽した様子で、一散に駈け出して逃げて行つた。後に蕎麥屋は不審さうに眺めてゐた。

一方逃げ出した芝翫は、息せき切つて家へ飛び込んで来た。

『あゝ怖しかつた、すんでの事に、えらい眼に逢ふところだつた。』

と、蒼蒼になつてゐるので、女房が驚いて様子を聞いて見ると、八文の蕎麥代に、一分の金を出したが、足りなかつたと見えて、蕎麥屋がモシ〜と追ひ駈けて来たので、一生懸命に逃げて来た時、震へながらの物語に、女房も漸く事情が解り、

『親方、それは足りないので追ひ駈けたのではありません、あんまり多過ぎたので、お釣を寄越さうとしたのですよ。』

と説明したので、芝翫もホツと安心した様子で、

『さうか、一分は八文より多いのか、それで安心したよ。』

と、につこりした。

名優女形の女らしい逸話

初代 芳澤 あやめ

我が歌舞伎劇の第一頁を飾る、實女方の名優として、水木辰之助と肩を並べるものは初世芳澤あやめである。寧ろ其の才藝と實力に於いて、辰之助を凌いだものであつた。あやめは、辰之助と同じく延寶元年に生れて、享保十四年に世を去つた。初め初世嵐三右衛門に教へを受けて、若衆方から立役となつたが、間もなく若女形として其の名聲を博するに至つた。彼は常に、

『女形は色が基です。生れ付いて美しい女形でも取廻しを立派にしようとするとかさめまます。又心を付けて品やかにしようとするとか嫌みになるものです。ですから平生から女になつて暮してゐなければ、上手な女形とは申されません、舞臺へ出て、此處は女の要め處と思ふ心がつくと、もう男になつてしまふものです。』

と云つてゐた。また、

『女形は女房のある事を隠し、御内儀様がと人に云はれる時は、自然と顔を赤くする程の心がなくては勤りません。』

さうした心懸けの人であつたから、日常生活は總て女其儘であつた。——云ふ迄でも無く江戸時代の女形は、髪は俗に樂屋銀杏と云ふのに結び、前髪の處には帽子と云つて紫などの布をつけ、着物は常に振袖であつた。従つて形から云つても女姿で生活してゐた者である。

或る日、中の嵐三右衛門（二代目）が、あやめを招いで夜話をした時、とろゝ汗を夜食

に出すと、あやめは頬を赤らめて、箸を取り兼ねてゐた。それを見た三右衛門が、
 「女形はその嗜みが無くてはならない。さて〜私の心得違ひで、とんだ馳走を出しま
 した、何時も心安くしてゐるための存じ違ひと許して下さい。」
 と詫言を云つて、肴を改めさせたさうである。あやめは其の食べ物にも女らしさを失は
 なかつたし、また仲間同志の間でも、その女らしさを失はなかつたのである。——その後
 三右衛門は片岡仁左衛門に向ひ「あやめは眞實の名人だ」と、その時の嗜みを語つて感心
 してゐたと云ふ。

中村千彌

千彌染め——紫に大きな絞り——の名は今に傳へ残されてゐる。當時この絞り染は、江

戸大阪の街々に流行したものであつた。その千彌染の主中村千彌は、初め江戸で桐山政之
 助と云つて端役の女形を勤めてゐたが、元禄十三年の春、村山平右衛門と一緒に大阪へ上
 つてから、千彌と改名して其の名を知らるゝに至つた。

彼は肥り肉で、あまり好い形ではなかつたらしいが、「思入れが正身の女」と評されて、
 「上々吉」の位に擧げられてゐた。

彼が十数年ぶりで江戸へ歸る途すがらの事である、ある峠を駕籠に乗つて越す際、

『モシ〜、駕籠屋はん。』

と優しく彼が呼びかけた、その聲に雲介は駕籠を止めて、

『なんの御用です。』

と尋ねると、彼は駕籠の垂をそつと上げて、美しく化粧した顔をのぞかせると、さも耻
 しさうに、振袖を口にあてながら、

『わて、……おしつこがしたうおますのやわ。』

と云つたので、駕籠屋が直ぐ草履をとつて揃へると、千彌は靜に立ち出で、四邊を見廻してから、附添ひの男衆に手を取られながら、とある木蔭へ行つて、しやがんで用を達す風情が、どうしても男の役者とは思はれず、女らしい濃艶を極めたものであつたと傳へられる。

瀬川菊之丞

元祿四年大阪に生れ、享保寛延にかけて、その美貌と技藝に満都の人々を艶殺した女形は、初世菊之丞（路考、濱村屋）である。古い劇書に、『六十歳に今二三年と云ふまで美しく、振袖の似合ふと云ふは合點の行かぬ事、舞台はさもある、地で見ても其の美しさ、世界の色を集めたるやうなり。』

と記され、寛延二年の春五十九歳で世を去るまで、その美しさを稱へられたのも、彼の平常に於ける「女としての」素養に依るものであらう。延享三年彼が五十七歳の時、自ら女形の心意氣を詠んだ歌に、

おもかげの變らなでしこ秋ふけて

我が起き臥しを人に知られな

とあるのを見ても、年と共に容色の衰へ行く自分の面影に悩む、眞の女らしさがうかゞはれる。

彼が菊之丞と名乗つたに就いては、其處に床しいローマンスがある。——昔英雄秀吉が朝鮮征伐の壯舉を決行した折、九州の武將に瀬川采女と云ふ武士があつた。勿論彼も海を越えて遠く朝鮮の野に轉戦してゐたのである。その采女には菊と云ふ美しい貞節な妻があつた。菊女は良人の凱旋を一日千秋の思ひで待ちわびてゐた。ある時渡海の係船があつたので、菊女は戀しい良人への思慕を文章に秘めて、その一封を便船に托したのである。す

ると折悪しく海が荒れて、船が沈まうとしたので、積んでゐた荷物を全部海へ流した。菊女の思ひを盡した文も勿論海へ流されたのである。それなのに不思議や其の文だけが名護屋の陣所近くの濱へ流れついた。やがて夫れが秀吉の前に持ち出されて御覽に入れられた。情熱的な英雄秀吉は、偶然にも其の文を見て、深く菊女の情緒に感激させられた。秀吉は直ぐに采女を戦場から呼び返して、菊女の許へ歸してやつた。——これこそ女の身の鑑で女形にふさはしい名であると云つて、その夫婦の名を合せて、瀬川菊之丞と名づけたのであると云ふ。

彼は死に臨んだ時、髪を結び直させ、湯浴をして後に顔に化粧を施し、眼の覚めるやうな振袖に身を飾り、帽子（前髪の布）までかけた上、枕元で百萬遍を唱へさせながら、美しく眠るやうに死んで行つた。

瀬川菊次郎

寛保から寶曆に亘り、京阪に謳はれた名女形で、初世菊之丞の實弟である。顔は兄に劣つてゐたが、地藝を以つて名人と稱された。殊に嫉妬の仕打よく、科白の云ひ廻しが巧みであると評判された。

菊次郎が未だ獨身の頃である、彼は深川に馴染藝者が出来たが、兄の菊之丞が嚴格なやかまし家であつたので、表立つて女と文の遣り取りが出来ないから、鬘師の藤十郎に打明けて、女からの文は總て藤十郎宛に届けさせる事にしてゐた。すると或る日、藤十郎の留守の處へ届いた女の文を、事情を委しく知らぬ藤十郎の妻が見つけて、思はず嫉妬のため文を開いて中を見ると「未々は女房にして下さい云々」と云ふ文句があつたので、前後の

思慮もなくカツとなり、その手紙を片手に良人の行つてゐる濱村屋(瀬川)の家へ、泣きじやくりながら叫び込み、藤十郎をつかまへると、其の女からの手紙を差しつけて、怨みつらみを並べて口惜しがるのであつた。藤十郎が、

『それは俺の處へ來たのではない。』

と辯解しても、

『宛名がちやんとお前さんの名ではないか。』

と云つて女房は承知しない。この騒ぎに菊次郎も出て來て見ると、自分の處へ女から來た手紙のため、藤十郎が飛んだ迷惑を受けてゐる始末なので、菊次郎も赤面し、その中へ飛び込んで、色々詫び事を云つたが、藤十郎の女房は承知しない。餘儀なく「實はその手紙は私の女から……」と云はうとして、ふと後を見ると兄の路考(菊之丞)が覗いてゐるので、それと判然云ふ事も出來ず、彼は女のやうにワツと其の場へ泣き伏してしまつたのであつた。

勿論その折菊次郎は、樂屋銀杏に結び上げ、振袖姿であるから、その場の様子を眺めてゐたものには、菊次郎が藤十郎の女房に見え、眞實の女房が他人に見えたと云ふ事である。現在この渦中にあつた藤十郎でさへ、

『あの騒ぎのなかでも、私には仙魚(菊次郎)さんが、まるで自分の情婦のやうに思へました。』

と後で人に話したと云ふ。

兎に角其の騒ぎは、兄の路考が出て來て、藤十郎の女房をなだめ、無事に歸す事が出來たが、後で菊次郎と藤十郎とは、路考の前へ呼びつけられて、散々に小言を食つたのである。でも菊次郎が、その時、

『私は今日始めて女の眞實に怒つた時の様子を知りました。來た時は知りませんが、歸る時履物を探ねると、片方は外にあり、片方は内にありました。女は何時も丁寧に履物を揃へるものですのに、あのやうに怒ると、足に土のつくのを忘れ、跣足で下に降り、

また内へ上つて履物を揃へて歸りましたが、女が怒るとあゝしたものと初め知りました。」

と云つたので、兄も、

「それは好い心つけだ。」

と云つて機嫌が直つたと云ふ事である。——あの騒ぎのなかで、其處まで気がついたとは、流石に名人だと人々が噂しあつた。

四代 目 芳澤 あやめ

橋家巴江と云つた人で、明和八年十七歳の秋、初めて女形に進んで舞臺を勤めてから、順次名を擧げて、文化四年五十三歳の時あやめの名をつぎ、「眞上々吉」の位に置かれ、そ

の美しい容貌と姿に依つて異常の人氣をあふつてゐた。主として意氣向きの役を得意としてゐたと云ふ。

うらゝかな彌生の或る日であつた。彼は客に伴はれて、郊外の某處へ遊山に出かけたのであつた。——途中から何かしら氣分が悪さうな様子であつたので、とある茶店に一休みする事になつた。

「あんた、どないしたんや。」

と客が尋ねると、先刻からうつ向き加減に身體をくねらせて、しきりに颯顛の邊を片手で押へてゐたあやめは、靜に顔を上げると、

「別に、どうもおまへんけど……」

と云つたので、重ねて客が、

「頭でも痛むんかいな。」

と尋ねると、あやめは一寸頷きながら、

「また何時もの血の道が起きましたのやろ。」

と云つた。——客も其の答へには一寸面喰つた形で、危く吹き出しさうになつたが、

「ほんまの女子のやうやなア。」

今更に、白粉と振袖に包んだ、その女になりきつた仇めいた姿態を凝視しない譯には行かなかつた。——と云ふ逸話が傳へられてゐる。

五代 岩井半四郎

杜若半四郎と謳はれた人で、美貌世にすぐれ、俗に「眼千兩」といはれ、非常に顔面の表情に富んで、且つ愛嬌と色氣が溢れるばかりであつた。

天保九年の春、彼は六十三の歳で「二十四孝」の八重垣姫を演じたが、老年の事として流石に身體が自由にならず、狐火の處では袴股立の侍二人に立廻りをさせ、その助けを受けながら、例の狂ひの間を演じたのであるが、彼は少しも老體を暴露せず、その色氣は垂たるばかりであつたと云はれる。

ある時「平假名」の芝居で、名優三津五郎（三世）の源太に半四郎は千鳥を勤めたが、その芝居を見た三津五郎の最負連が、一夜彼を茶屋へ呼んで馳走をし、

「親方の源太の好いのは云ふまでもないが、取分け千鳥が歸つて来て茶を出す時、湯呑を取りながら親方が千鳥を見る様子が、色氣もあり情も含まれ、若殿と腰元との間ながら、抱寝した女に違ひなく見えるのは、如何にも感心させられた。」

と云つて褒めると、

「いや、あれは全く杜若の仕向けが好いからで、そのため自然と情愛がうつるのです。……皆さんには聞えますまいが、千鳥がお茶を出します時、口のうちに「お歸り遊ばしまし」と云ふのです。この一言で、なんとも云へぬ情愛が出て、自然とほんとに可愛く

なるのです。……あの杜若は確に女になり切つてゐます。』
 と三津五郎が答へたと云ふ。——當代隨一と稱された名優三津五郎の斯うした折紙は、如何に半四郎の優れた人であつたを物語るものである。
 彼は弘化四年四月、七十二歳で世を去つたが、「杜若半四郎」又は「大太夫」と稱へられ、その名一世を風靡したものであつた。

四代 山下金作

天保より安政の終りにかけて、京阪に於いて女形として第一に指を屈せられた人である。三世嵐三五郎の門人で、初め三藏と云ひ、後三勝と改め、天保四年に山下金作（天王寺屋、里虹）の名を襲つた。

容姿もよく、特に音調と科白廻しに妙を得てゐた。「お染久松」で油屋の後家を勤め、お染に向つて「ひよんな事をしたもつたが、出来たことならしよことが無い」と意見する時の科白廻しの氣の變り目が、何とも云はれずによく、當時靱太夫は夫れを眞似て、その義太夫節に語つて好評を得たと云ふ。——然し餘り音聲が朗か過ぎて、愁嘆に適せず、色氣も乏しかつたので、年増役を得意としてゐた。

藝道には非常に熱心な人で、「お染久松」の時なども、久作が久松に意見をする間、まだ自分の出場にもならないのに、早くから舞臺裏の暖簾口の處へ出て來てゐて、じつと中の話を聞いてゐるのであつた。或る客が「なぜ早くから裏へ行つてゐるのだ」と尋ねると、「出場のキツカケまで部屋にゐても宜しいのですが、同じ事なら暖簾の蔭にゐて久作の意見を聞いてゐますと、後で舞臺へ出ました時、しつくりと意氣を合せて科白が云へます。……萬事が此の心で勤めないと、女形は情合がうつらぬものです。」と語つたので、客も深く其の熱心に感服したと云ふ。また彼は女形の秘訣を説いて、

「世話女房がよければ、良人を尻に敷くものですから、こゝを好く用心して、良人より利口にならぬやう、如何にも親切に勤めなければなりません。良人を馬鹿にするのは、世話女房が第一に慎むべきことです。」
これは、あながち舞臺ばかりの女形の心得では無いやうだ。

尾上菊次郎

菊次郎（梅花）は文化十一年に大阪で生れた人で、初め片岡仁左衛門の門に入り市松と名乗つたが、後二世中村富十郎の弟子となり、更に天保六年二十二歳の時、江戸へ下つて三世菊五郎の門に入つて、菊次郎の名を受け、音羽屋同族の列に加はる事を得た。
「妙なひよつとこ面にて、容貌悪かりしかど、藝の妙に達せしたため、自然と婦人の如く

見え、果ては其の面の可笑しきさへも心にとまらぬ程なり。」

と「團州百話」に記されてゐる。また「俳優百面相」には、

「優が全盛の頃は四代目菊五郎、阪東しうかと共に、一しきり三櫓の立女形にして、優は其の三人目に置かれたれど、役者は一番上手にてありしやうなり。」

と記されてゐる。主として世話女房を得意としてゐた。

彼は日常の生活に於いても、女性的柔順であつた。自宅にゐる時は、何時も針仕事に親しんで、平常の縫物は一切他に出さず、自分で縫つてゐたと云ふ事である。「女形は家にゐても女でなくてはいけません」と彼は常に他に語つてゐた。

或る日、濱倉と云ふ有名な旦那衆が、菊次郎の家の近所まで用達しに行つて、ふと往來で彼に行き逢つたので、

「太夫どこへ行きなされる。」

と聲をかけると、やさしい聲で、

「一寸、おぶう(風呂屋)へまわります。」

と答へたと云ふ。——その折彼は、もう五十前後であつたと傳へられる。

八代 岩井半四郎

田之助と共に、明治初年の劇壇を彩つた、近世の名女形である。

俗に舞鶴家の爺さんと呼ばれる、當代屈指の立役者中村鶴藏が、

「あの半四郎(八世)だけは、湯もじ一つで舞臺へ出しても、ほんとうの女になつてゐた。」

と、何時も口癖のやうに行つてゐたと、團十郎が好く他に話した。それほど、女になりきつた女形であつたのである。

或る日、何か男衆が半四郎に氣に食はない事をしたと云ふので、彼は大變怒つて、

「人を、馬鹿にするもんぢやないよ。」

と叫んで、首にかけてゐたお高祖頭巾をとつて、その男衆の肩のあたりを叩いたが、その様子が何うしても男と云ふ處はなく、丁度内儀さんが番頭を叱つてゐるやうな姿であつたので、見てゐた者が「あんなに怒つた時にでも、やつぱり女になつてゐる」と、しみじみ感心させられたと云ふ。

市川女寅

五代目門之助(瀧野屋)の養子になつた程の人で、當時女形の花形として人氣を沸かしてゐたが、病弱のため惜しい事に早く世を去つた(明治十二年五月死去)。

彼が春木座(本郷)の立女形として好評を博してゐた、明治九年の事である。ある日稽古のため本郷の座へ行かうとして、男衆と共に俵に乗つて淺草の自宅を出かけたが、途中から眩暈が起り、湯島の切通しへかゝつた頃は、最早俵上に堪え難いまでになつたので、男衆に命じて何處でも好いから頼んで、休ませて貰つてくれとの事であつた。然し其の邊には折悪しく知人の家も無く、男衆も狼狽困惑してゐる様子を見てゐた、その前の家の小間物屋の主人が、役者とは少しも知らず、由緒ある家の婦人が急病を起して難儀してゐるものと察し、なほ之れは必ず妊娠などしてゐる方で、きつと俵上で産氣でもついたのであらうと思ひ、その妻と共に外へ出て来て、叮嚀に彼を俵から下ろし、靜な室へ案内して休ませてくれ、なほ醫者を呼びなどして手當をしてくれた。

それも無理の無い事で、女寅が其の時の姿は、頃も五月の事で、頭は樂屋銀杏を莖蒲で結び、縮緬に首ぬきの花美しい模様を染め出した單衣に、萌黄献上の帯を伊達巻にしてゐたのであるから、風姿妖艶、美しい女と見たのも尤もであらう。

暫くして眩暈も治つたので、改めて重ね重ねの禮を述べたが、その調子に多少男らしい處があつたのを、その家の夫婦も可笑しくは思つたが、なほ解らず、

「奥様の御様子は、どうも御妊娠のやうに思はれますから、今暫く御休息の上、御氣をお静めになつたが宜しうございませう。」

との事に、女寅もほとく縮し、「實は」と云つて、自分が春木座に通ふ女寅と云ふ役者である事を申上へ、一層叮嚀に禮を述べたので、初めて夫婦もそれと知り、驚きつゝも其の粗忽を詫びたと云ふ。

江戸期畫道名家の逸話

狩野元信

狩野元信が未だ諸國を漂浪して歩いてゐる時分の事である。ある時泉州堺の一國寺に滞在してゐた事があつた。その折寺僧の求めに従つて、襖の板戸に檜を一本描いたが、やがて其の寺を去つて、東路へと志した。幾日かを経て箱根山を越えようとした折、ふと山中で檜の枝振りの心に適つたのを見出したので、先頃一國寺で描いた檜に、この枝振りを書き添へたならばと思ひつくと、もう何もかも打ち忘れ、直ぐに踵を返して、族路はるばる堺の一國寺を指して戻つて來た。

それと見た寺僧が驚いて、

『どうなさつたのです。』

と尋ねると、元信は、

「箱根まで參つた處、山中でふと檜の枝振の好いを見つけましたので、それを襖の檜に書き添へようと思つて歸つてまゐりました。」

さう云ふと、寺僧の啞然として眺めてゐる中で、直ぐ仕度を整へ、板戸の繪に枝を書き添へた。そして一段畫趣の上つた襖を眺めて、

『あゝ、これで引返した甲斐があつた。』

と非常に喜び、寺僧の引留めるのを肯かず、また草鞋をはくと、東路さして出立した。

佛繪師良秀

ある夜突然近隣から火を發して、炎は次第に風下へと擴がつて行く。そのなかでも、良秀は一向に驚いた風もなく、相變らず繪筆をとつてゐたが、その中火は自分の家にまで燃え移つて來た。すると彼は、他から頼まれた繪は勿論、自分の妻までも打ち棄てたまゝ、只だ獨り、繪筆を握つた儘、ぶらりと外へ遁れ出た。聽て紅蓮の如き猛火は良秀の家を包んで、炎々として燃え上つて行つた。——外へ出た彼は、じつと燃え盛る我が家を眺めながら、動かうともしなかつた。然も其の顔には嬉しさうな微笑さへ浮んでゐるのであつた。

火事見舞に駈けつけた人たちは、その良秀の様子を見て少なからず驚かされた。そして口々に、

「良秀坊は自分の家が焼けたので、氣が狂れたに違ひない、氣の毒なもんぢやないか、……あれ、大きな聲で笑ひ出したぜ。」

囁きあつてゐた。良秀は暫くして、自分を見守つてゐる人たちの群に氣がつくと、さも喜ばしさうに笑ひながら、

「私が之れまで描いてゐた火炎は、まるで間違つてゐたのに氣がついた。今こそ私は眞實の炎を眺める事が出來て嬉しくつて堪らない。これから私は眞實の火炎を描く事が其來よう。」

さう云つて喜んだ。——其の後良秀の描いた不動尊は、眞に迫つたものとして、名高いものゝ一つになつたと云はれる。

尾形光琳

元祿十四年春の初め、光琳は繪に依つて時の帝から法橋に叙せられて、一層その名が世間に喧傳された。

吉野、嵐山、あちこちの花の便りが繁くなると、光琳も知友たちと連れだつて、嵐山へと花見に出かけた。

文華の殷盛を極めた當時にあつては、花を見に行く人々の衣裳や持物は、眼を驚かすばかりに粧ひが競はれた。咲き誇る櫻花の下には、華かな毛氈が延かれ、美しい行厨のなかからは山海の珍味がひらかれて、灘の銘酒が盃にもられ、人々は三味や大鼓にさんざめくのであつた。

光琳の仲間も、とある場所に座を構へると、それぞれ美しい折箱から食物を出して、花を眺め舌を樂しました。その中で、光琳は獨り貧しい竹の皮に包んだものを腰から取り出すと、それを開いて握飯を食へ始めた。

それを眺めた人々は「今の世に畫工の名家として時めく光琳に似合はず、なんといふ見すばらしい辨當であらう」と不思議に思つて、デロ／＼と眼ひき袖引きしてゐるのであつた。然し、好く眺めてゐる中に、人々はそれが只だの竹の皮で無い事に氣附いて、今更に驚嘆の眼を見張るのであつた。——彼の竹の皮の裏には、眼の覺めるやうな金泥で、花鳥山水の蒔繪が、一面に施されてゐるのである。

光琳は、やがて握飯を食へ終ると、悠々と立上つて、靜に歩を直ぐ側を流れる大堰川の岸へと運ばせたが、つと持つてゐる竹の皮を其の流れのなかへヒラリと捨て、しまつた。それを見た人々は、思はず「アツ」と叫びを擧げて讚嘆した。そして今更に光琳の風懷を床しがつた。

彼の生活は寛濶と豪華を極めたものであつた。彼は平常いつも黒羽二重の羽織と着物を着てゐた。それが何時も同じ物を着てゐるやうに考へられたが、彼の家の箆笥のなかには、同じ黒羽二重の羽織と着物が、數十襲藏されてゐたと云ふ事である。

初代 廣重

或る大晦日の夜であつた。廣重は家の用事もすつかり片づいたので、ぶらりと家を出た。——平常から好く出歩く事の好きな人であつた。——丁度築地の邊までブラ／＼歩いて行つたが、今と違つて、宵とは云へ街は暗く寂しかった。

疲れを覺えたまゝ、とある水菓子屋の店へ立寄つて、蜜柑などを食べながら休んでゐた。そして何かと其の店の主人と世間話をしてゐたのである。すると話か當時世間で評判にな

つてゐた、廣重自身の風景畫の噂になつて行つた。尤も其の店の主人公は、その客が廣重であらうとは勿論知らなかつたのである。——主人は云ふ、

『近頃廣重と云ふ人の風景畫の版繪が大變評判になつてゐますが、私や感服しませんね、第一あの街道に、あんな様な風をした人物が通つてゐる筈がありませんや。なんぼ繪空事と云つたつて、馬鹿／＼しい繪があつたもんですよ。』

さうした風に、盛に廣重の描いた畫に就いて、色々な缺點を指摘し、散々に罵倒するのであつた。——廣重は、なんと答へるすべも無くして、只だ苦笑ひをして頷くばかりで、

好い加減に調子を合せて、その店を立去つたのであつた。然し、この水菓子屋の主人が云つた忌憚ない批評は、深く廣重の胸に響いたのであつた。——偽らざる、眞實の自然を描かうとするには、充分に其の風光に接して、如實にそれを寫したものでなければならぬ、虚を描き傳へてはならない、それには幾度でも、親しく旅に出て、その風景を眺め、旅の人の姿に接して見なければならぬ、其度には些細な虚

偽があつても許されない筈であつた。さう思ふと、直ぐにも旅へ出かけたいやうな氣持に迫られた。

でも、丁度其の折、廣重が書いてゐる富士三十六景が未だ出版の運びになつてゐなかつたので、暫く見合せなければならなかつたが、その中健康に故障が出来、當分繪筆を捨てて靜養を要するやうになつたので、急に日を繰り上げ、後事を人に托して、愈々望みの旅に鹿島立つ事になつた。

東路へ筆をのこして旅の空

西のみくへの名どころを見ん

と云ふ廣重の有名な歌は、この時詠ひ残したもので、「東路へ筆を残して」と云ふのは、即ち富士三十六景の出版を見ずして旅に出たからである。かくて彼は、驛路／＼の風光、道行く旅人、馬子雲助まで、ゆたかに畫囊を肥して來たのであつた。

葛飾北齋

浮世繪の大家として、風景に美人に、廣重や歌麿を凌ぐ特殊の技能を残してゐる北齋は、雅味豊に風懷掬すべき多くの奇行と逸話が傳へられてゐる。

嘗て將軍家齋に招かれて、所謂御前揮毫の榮に浴した時、彼は一羽の鶏をぶらさげて將軍の前に出た、やがて一枚の唐紙を横に長く擴げて、刷毛をとつて夫れに藍色でながながと塗りつけると、持つて來た鶏の趾に朱肉をつけて、その唐紙の上にベタ／＼と押して行つた。かくて見る間に立田川の紅葉が描き現されたのである。

米一粒へ雀二羽を描くと云ふ器用さも、北齋は有つてゐたし、また逆にも横にも、或は指先や、更に鶏卵や、升や、徳利や、種々なものでもつて、意想外の繪を自由に描いて他

を驚かしたりした。

或る時、梅幸(三代目菊五郎)が輿に乗つて北齋の家を訪づれた。——然し貧しい彼には、煙草盆や茶道具の用意などは無く、その上掃除をした事も無い部屋は、芥溜同様のきたなさであつた。盛装した梅幸は、その穢苦しい座敷を見ると、直ぐ座る氣にもなれなかつたと見えて、輿の中の毛氈を取り寄せると、それを敷いて座つた。この仕草が、北齋の痾に障つたと見えて、彼は梅幸の方を振り向うともせず、何を頼んでも一言の返事さへしなかつたと云ふ。

然し、其の後、梅幸とは仲直りが出来て、親しくもなれば、梅幸も常に北齋の家を訪れて、何かと教へを受けるやうになつた。——或る年、梅幸が一世一代の芝居として「東海道五十三次」を舞臺に上す事になつたので、北齋の一覽を恭々しく頼みに來た、北齋も快くそれを承諾した。

丁度それは夏の最中であつた。貧しい北齋は、二朱の金を得る爲めに、毎晩使ふ大切な蚊帳を賣拂はねばならなかつた。そして其の二朱を懐中に入れると、梅幸の演てゐる芝居小屋へと出かけて行つた。やがて芝居がはねてから、北齋は梅幸の樂屋を訪ねて、

『これはほんの寸志だ。』

と云つて、懐中の二朱を梅幸に與へると、悠々として……蚊のブン／＼唸つてゐる、蚊帳の無い本所石原の自宅へと歸つて行つたのであつた。……彼はこんな氣慨の持主でもあつた。

又、或る日、幕府御用達鶴の屋の某が、北齋に畫帖の揮毫を乞ふため訪ねて來たが、その折北齋は、南向きの廊下に出て、一心に着物についてゐる虱を取つてゐる最中であつた。それで客が案内を乞ふと、

『今、さし迫つた急用があつて、繪は描けないから、今日は歸つて下さい。』

と、北齋が虱をとりながら答へた。それでも尙ぐ／＼して中を覗き込んでゐると、何を思つたか彼は、大きな聲で、

「……誰か私の家の様子を聞いたら、素敵に綺麗な家たと云つて置いて貰いたい。」
と怒鳴つたので、客も流石に啞然として、餘儀なくその日は引下つたと云ふ。
北齋は九十歳で死んだが、彼は尙ほ「もう十年生きたい、それが出来ねば五年でもよいから生き延びたい、さうしたら本當の畫家になつて見せる」と云つて、尙ほ其の死を嘆いたと云ふ事である。

酒井抱一

抱一は播川姫路城主、酒井忠次の弟で、江戸小石川の藩邸に生れた、云はゞ大名の御舍弟である。三十七歳の時、病と稱して髪を剃り、西本願寺文如上人のお弟子となつて、法名を等覺院抱一と授けられ、暫く京都に行ひすまして、權大僧都にまで叙せられた。

その後、また何を感じたか江戸に下り、下谷根岸に居を構へ、雨華庵と稱し、金の豊であるまゝに、畫事風流に身を任し、遊興三昧に其の日を送つてゐた。そして吉原の花魁を身請し、それと一緒に附添ひの新造や禿まで庵に連れて来て、全で廊のまゝの廊言葉を使はせてゐたと云ふ。

畫は狩野高信(永徳)、豊春、宋紫石等に師事したが、谷文晁にも學んでゐた。——ある時文晁が、

『私は尾形光琳の繪こそ實に崇敬すべきものだと思つて存じますが、悲しいかな今其の遺法を繼ぐものがありません。一體尾形流の繪を何かうとしますには、繪の具を選んで價を問はないと云ふ人でなければ出来ません、貴方のやうな富貴で閑のある方が研究なされば一番適任だと存じます。』

さう云つて勧めたので、以來抱一は一心に尾形流を學び、遂に光琳の遺鉢を傳へた唯一の作家として後世に其の名を傳へられるに至つたのである。

抱一が繪の具の善惡を選んだ事は非常なもので、或る時、姫路藩の家老某が、氣嫌伺ひ方々挨拶に来て、

「お上の御用で京都までまわりますが、何か御用がございましたら、御遠慮なく仰せつけ下さいませう。」

と云つた、すると抱一は、

「それは丁度幸ひだ、京都へ参つたら某と云ふ店で、胡粉を二兩目ほど買つて来て貰ひたい。」

と頼んだ。家老も高が胡粉の事ではあり、些少な物だと考へたので、直ぐ御引受けして歸り、やがて京都へ着いたので、其の指定の店を訪ねて買はうとする、

「上人のお用ひになるのは特別の製品でございますから、直ぐには出来ません。」

との事で、その後數日間待たされ、然もその僅な胡粉の代金が三十兩と云ふ高價であつたので、今更に家老も驚かされたさうである。

谷 文 晁

寫山樓又は畫學齋と稱して、時の名宰相松平樂翁侯に特別の知過を受け、廣く文人雅客の間に交り結び、貴紳諸侯を凌ぐ豪華な生活をしてゐた。家には賓客が晝夜絶えず、特に名ある料理番を召抱へて、客膳の献立調理に日夜従はしめたと云ふ。當時の畫人としては珍らしく恵れた人であつた。

その文晁が、生涯の中で五難と稱して、自ら常に愧ぢてゐたと云ふ逸話の一つを茲に記して見よう。

ある日文晁の宏壯な玄關に、一人の田舎者らしい男が訪ねて來た。その男は、

「私は伊勢の者ですが、國への土産に何か一枚先生の繪を頂戴いたしたいと存じて伺ひ

ました。』

と云つて、一封の目録を差出した。取次の書生から、その話を聞いた文晁は、

『ウム、また田舎者の畫乞者か、……先刻描き損じた鶏の繪があるから、あれでもやつて置け。』

と云つたので、その通りに取次の書生が、その描き損じた繪を渡すと、田舎者は喜んで歸つて行つた。その後で、フト文晁が田舎者が置いて行つた目録を開いて見ると、當時としては莫大の額である小判が十兩入つてゐた。

文晁も「これは氣の毒な事をした」と思つたので、直ぐ書生を走らせ、その男の後を慕はせて旅店と姓名を尋ねにやつた。やがて書生が歸つて來ての報告に「あの方は伊勢松阪で名高い豪農村田某と云ふものです」と云ふ事が判つたので、今更に文晁も其の扱ひ方の禮を失つてゐた事を後悔し、自ら他の繪を持つて其の族籠に村田氏を訪ね、

『先刻のは、書生の誤りから、書き損じをお渡しした事ですから、どうか此の繪とお代

へ願ひたい。』

と頼んだ。すると其の村田氏は、笑ひながら、

『先生が、左様に迷惑される繪を持つてゐてこそ、興趣も深いことでございます。お代へ下さるには及びません。』

と云つて、何うしても返さなかつた。

文晁は深く愧ぢて、後年門人たちにも、その話をして「あれは私が一生の過ちだつた、心を慢じて身を過らぬやう、お前たちも好く心得て置け」と云つて、誠めてゐたさうである。

椿 椿 山

草蟲花鳥、肖像を描くの名手として、椿山の名は既に世に知られてゐよう。然も讀書を好み、武藝を好くした。

入門を乞ふ者があると、先づ書を與へて、「風韻と云ひ氣韻と云ふのも、皆讀書から出るもので、まづ書を讀まれよ」と云ひ聞かせたと云ふ。そして自身は、毎朝曉に床を出ると、先づ抜刀數十度に及び、それから畫筆を執つたと云はれる。殊に老母に對して、孝養至らざるものがなかつた。

ある日、隣家に住ふ西村某と云ふ武家が尋ねて來て、

「私は、御承知の通り武骨一遍の者で、貴殿の描かれる繪が、どのやうに優れたものであるか解り申さぬが、只だ御老母に對せらるゝ御孝養の程には、つくづく感じ申す次第でござる。何事御染筆のもの一葉を給はり、これこそ孝子の筆になる繪なりとして、子孫に教へ遺して置きたいと存する、御承諾願はれまいか。」

と云ふ依頼であつたので、椿山も非常に感激し、特に大作を描いて隣人西村氏に贈つた。

後世椿山の傑作と稱せらるゝ「名花十友圖」と云ふのが夫れであると云はれる。如何に椿山が、孝子として又尊い行ひのあつた人かが察せられやう。

英 一 蝶

「朝妻船」を描いて、幕府當局の怒りに觸れ、遠島にまで處せられた一蝶は、繪の大家であると共に小唄を作る事の名人であつた。彼が自作の小唄を何時も花都と云ふ盲人に節附させ、自分でそれを唄つた。聲も非常に美しいものであつたと云はれる。紀文や奈良茂にも愛されて、何時も酒間の興を助けた。——と云ふと、如何にも幫間式な人物のやうにも思はれるが、彼も亦江戸子の氣慨の持主だつた。

一蝶は兼てから有馬侯の眷顧を受けてゐた。それで或る時同家から註文を受けた、六曲

屏風の繪を描き上げて納めに行くと、その當時として大金の二百兩と云ふ畫料を下げられたのであつた。

彼は、その二百兩を懐中にして、大名のやうな氣で、ブラ／＼と街を歩いて來た。フト通りかゝつたのは道具屋の前で、その店先には一つの立派な石燈籠が置いてある。それに眼がつくと、一蝶はじつと足を止めて動かうともしなかつた。——この石燈籠は、當時好事家仲間の評判になつてゐたもので、去る大名からも望まれたが、値段百兩を一分も引かねと云ふ呼び聲であつた爲め、未だに商談が纏まらずにゐた。——一蝶の頭には、その瞬間人知れぬ慾望が沸き立つたのである。彼は暫く其の燈籠を眺めてゐたが、やがて懐中から百兩の金を掴み出すと、その店へ飛び込んで石燈籠を買取つたのである。

翌日、一蝶の貧しい狭い庭には、その大きな石燈籠が据えられたのであつた。彼は夜の來るのを待ち兼ねたやうに、それに灯をとすと、まだ走りの高價な新茄子を山のやうに買込んで、そのしぎ焼を肴に、燈籠の灯を眺めながら、獨りニヤ／＼と微笑を含んで盃

を手にしたのである。

「俺は大名より偉いんだぞ。」

彼はさう云つて、獨り誇つた。

池 大 雅

大雅の妻町子は、玉瀾と號して當時關秀畫家として名があつたが、同時に良人に對する理解と貞節さに於いて、世人から敬愛の的となつてゐた美しい人である。夫婦は洛東眞葛ヶ原に草堂を結んで、平和な日を送り迎へしてゐた。——大雅の畫名は順次高くなつて行つたが、性得金錢に無慾な彼は、何時も貧しさから脱せなかつた。

客が畫料を持つて來ると、入口に置いてある水甕を指さして、

「どうか、あれへ入れて行つて下さい。」
と云ふのであつた。

大雅の家は、八疊一間に取次の間がついてゐるだけであつた。——或る夜、彼の家に客が一泊する事になつて、玉瀾が座敷へ床をのべてくれたが、それは思ひの外立派な群内編の夜具であつた。客はそれに寝かされた。

夜半に客は眼が覺めて、圓へ行きたくなつたが、勝手が解らなかつたので、主人の大雅を呼ぶと、

「ハイハイ、只今。」

と云ふ聲がして、狭い取次の間の毛氈の下から大雅先生が、そのくとはひ出して來た。その様子に客がびつくりして、

「御内室は……」

と云ふと、……諸方から頼まれて溜つてゐる紙や絹を積み上げた下から、玉瀾がゴソゴ

ソと出て來たのである。——客の眼は思はず熱くなつたと云ふ。

また或る時、大雅は大阪へ行く事になつて、家を出かけたが、その折大切な繪筆を忘れて行つた。直ぐ氣が附いた玉瀾が、急いで後から繪筆を持つて追ひかけ、建仁寺の前で漸く追ひついたので、

『もし、あなた筆をお忘れでございます。』

と云ふと、大雅は驚いたやうに振り返り、

『これは、どちらの方が存じませんが、よう拾つて下さいました。』

と云つて、その筆を受取ると、押戴いて禮を述べたが、またさつさと歩き出したのである。——その時彼の頭には、何か考へついた繪の事で一杯になつてゐたのであらう、筆を渡した人が自分の愛妻である事も氣がつかない。——でも玉瀾は、これも黙つて頭を下げると、何も云はずスタ／＼と家路に向つて歩いた。

一勇齋國芳

三枚續きの武者繪の家元で、幕末維新にかけて最も流行した錦繪描きの大家である。明治初年の畫壇に雄をなした、芳年や芳虎は其の門から出た逸才である。故實にも明るい譯ではなく、素要も無い畫工の出ではあつたが、その優れた氣魂が彼を一層名高いものにしたし、筆の上にも現はれたに違ひない。

ある時、兩國萬八樓の書畫會に招かれた國芳は、すつかり酔が廻ると、一層利かない江戸前の氣象が出て、

「よしッ、俺が一つ大きな奴を書いてやらう。」

と云ふと共に、座中の墨汁を皆な一つの摺鉢に集め、大きな庭箒を持つて來させると、

どつぷりと摺鉢の墨汁を浸し、

「さあ、皆などいた〜。」

と叫んで、驚き呆れてゐる客を座敷から廊下へ退かせると、國芳は其の箒を筆にして、數十疊の廣間に敷きつめた敷紙に、水滸傳中花和尚魯智深と九紋龍史進が、雪中奮闘の勇ましい繪を、一杯に描き上げたものであつた。

その雄大な席畫には、來客思はず息をつめて眺めてゐたが、彼が描き上げ終つて大きな庭箒を下に置くと共に、満場破れるが如き大喝采が響き起つたと云ふ。

勝川春草

或る年の正月、某家へ年頭の挨拶に行くと、その家の主人が、

『丁度好い折です、兼てお願いして置いた金屏風に、是非今日御揮毫が願ひたう存じます。』

と云はれたので、春草も初春の事と云ひ、斷り切れなくなつて、愈よ筆を執る事にした。喜んだ主人は早速金屏風を持出し、靜に墨をすつて、さて春草が最初の筆を下さうとした時であつた。突然飛込んで來たのは、その家の三歳になる子供であつた。人々がアツと云ふ間も無く、其處にあつた墨鉢を蹴飛ばして、新調の金屏風の上へ、サツと打ちあけてしまつた、その上、子供は自分も驚いて面喰つたため、墨だらけの足で、金屏風の上を歩き廻つてしまつたのである。

これを見た主人は勿論、居合せた人も、只だ呆然として、口も利けない有様で、主人は今にも泣き出しさうな顔をしてゐた。

然し、春草は一向平氣で、ニヤ／＼笑つてゐた。主人は其の笑ひ顔をさへ、怨めしさうに眺めてゐるのであつた。その中で春草は筆を持ち直すと、その墨だらけの金屏風に、ズン／＼と筆を走らせた、やがて其の屏風の面には、屠蘇酒に酔つた三河萬歳が、泥溝の中に落ちた繪が現はれて來た、子供がつけた墨の足跡は、その儘自然に、酔うた萬歳の泥足の跡に利用されてゐた。

これを眺めた主人の喜びは云ふ迄でもよく、居並ぶ人も、思はず感嘆の聲を擧げて、春草の即妙な機智と靈筆に感じ入つたと云ふ。

現代畫壇大家の逸話

下村 觀山

觀山氏が酒豪である事は有名だが、従つて酒に纏る逸話は澤山傳へられてゐる。今から八九年前の事、美術院同人の新年會か何かのあつたその時、氏は紋附の正装で出かけて行つた。

同人に木彫家の佐藤朝山と云ふ亂酒家がある、京都で四十五日間晝は寝て夜は飲み明し續けたと云ふ酒豪で、その宿には朝山係りと云ふ女中が特選されてゐて、その女は朝山氏

と同じ様に晝は寝て夜は起きて、氏の酒間を幹施したと云ふ逸話が残つてゐる。

この朝山氏腕はあるが、酒を飲むとだらしない、その上クダを巻いて喧嘩を賣りたくなると云ふ酒癖がある、同人の連中は夫れを知つてゐるから、敬遠して相手になつてくれない。その中で、同病相憐れむと云ふ心理からか、兎に角相手になつてくれるのは觀山氏だけである。宴が更けて酒の酔ひが廻るにつれて、朝山氏は觀山氏を相手に盛にクダを巻く、それでも嫌な顔一つせず觀山氏は相手になつてやつてゐる。

その夜は、雪あがりの、街路はひどい泥濘であつた。その路を、觀山氏は朝山氏の肩にかけた手を除けようともせず、千鳥足でもつれ合つて歩いて來た。クダを巻きながら抱きついて來る朝山氏が、足をすべらしてよろけた、二人は泥濘のなかにひっくり返つて、盛装もなにも目茶苦茶になつた。——朝山氏の酒癖を知りながら、逃避しようとしないうちに、氏の正直さの一面と情味が覗はれようと、去る人が話した。

小室翠雲

その夏(大正十五年)、氏は高崎に行つた。そして附近の山登りをしたが、その時蚊にさされたのが基で、マラリヤ熱に罹つて、四十一度の熱が續く重態になつた。

然し、氏が主宰する日本南畫院の第五回の展覽會が、九月の五日から開催され、四日は其の招待日になる、それ迄に自作を出品しなければならぬと云ふ重い責任があつた。それで八月二十六日に病をおして三人の近親に看護されながら、辛じて東京の自宅へ歸つた。

然し、腰がすつかり抜けてしまつた氏は、立つ事が出来ない。それでイザリながら筆をとつて「池塘秋思」と題する六曲一双の屏風を、一日一晩で描き上げて、漸く招待日の出品に間に合せた。——現在我が日本畫壇切つての筆の早い人ではあるが、之れは又病後の

腰も立たない身で、なんと云ふ早さであらうと、畫壇の人々は噂し合つてゐる。

橋本關雪

關東震災の前年であつたが、帝展で全員鑑査と云ふ事があつた。その時東京側の委員が京都側の委員を全部招待して、下谷の伊豫紋で宴を張つた。

その日、京都派を代表して、一場の挨拶をする人に選ばれたのが關雪氏であつた。

關雪氏は人の知る如く、畫壇に於ける第一人者であると共に、文筆に好く、言論に好く、行く處可ならざる無しと云ふ天才である。従つて其の代表者としての挨拶が、如何に堂々たるものであるかと、大いに期待されると共に、少なからず其の鋭い舌鋒を畏怖した者さへあつた。

愈よ宴は開かれて、開會の辭は述べられた、やがて身體の餘り大きくない關雪氏は、ヒヨコくと席の真中へ出て來た、そしてチヨコンと坐つたものである。——如何なる名論卓説が其の口から吐かれるか——一同は片唾を呑んで氏を眺めた。然し、氏は黙つた儘、暫くはじつとして頭ばかりモリくと搔いてゐる、やがて氏は頭を下げた。

「今晚は、有難う存じます。」

さう云ふと、又立つて、ヒヨコくと自分の席へ返つてしまつた。

一座は啞然として、言葉がなかつた。——期待は裏切られて、氏の挨拶は只だ數語で終つたのである。——然の言説に巧みな氏の、この僅か數語の挨拶が、時と場所にふさはしいものとして、當時の語り草となつた。そして氏の秀れた頭腦を賞した。

安田鞆彦

ある日、或る人が鞆彦氏を大磯臺町の邸に訪ねた。

驛を降りて俥に乗つた或る人は、その俥夫に向つて、「安田さんを訪ねる人が、近頃も澤山あるか」と尋ねた。すると俥夫は言下に、

「毎日六七人ありますよ。……ほんとに心ない人たちです。大磯の者たちは、先生が院展に出品なさる繪に筆を執られる時分は、どうかして先生の御仕事の邪魔をしないやうにと心掛けてゐます。それをやたらにお訪ねするなんて、ほんとに氣の利かない人たちです。」

訪問客で仕事の多いのを喜ぶ筈の俥夫に、さう云はれて、或る人も思はず俥の上で赤く